

発行者情報

【表紙】

【公表書類】	発行者情報
【公表日】	2023年3月23日
【発行者の名称】	中山不動産株式会社 (NAKAYAMA FUDOUSAN Co., Ltd.)
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 中山 耕一
【本店の所在の場所】	名古屋市中区大須4丁目11番5号 Z'sビル9F
【電話番号】	052-212-6072 (代表)
【事務連絡者氏名】	取締役 管理本部長 加藤 勝
【担当J-Adviserの名称】	株式会社日本M&Aセンター
【担当J-Adviserの代表者の役職氏名】	代表取締役社長 三宅 卓
【担当J-Adviserの本店の所在の場所】	東京都千代田区丸の内一丁目8番2号
【担当J-Adviserの財務状況が公表されるウェブサイトのアドレス】	https://www.nihon-ma.co.jp/ir/
【電話番号】	03-5220-5454
【取引所金融商品市場等に関する事項】	当社は、当社普通株式を2023年4月26日にTOKYO PRO Marketへ上場する予定であります。 当社は、上場に際して特定投資家向け取得勧誘又は特定投資家向け売付け勧誘等を実施しないことから、特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第3項の規定により、発行者情報に相当する情報を公表いたします。 なお、振替機関の名称及び住所は下記のとおりです。 名称：株式会社証券保管振替機構 住所：東京都中央区日本橋兜町7番1号
【公表されるホームページのアドレス】	中山不動産株式会社 https://www.nakayamafudousan.co.jp/ 株式会社 東京証券取引所 https://www.jpx.co.jp/

【投資者に対する注意事項】

1. TOKYO PRO Marketは、特定投資家等を対象とした市場であり、その上場会社は、高い投資リスクを含んでいる場合があります。投資者は、TOKYO PRO Marketの上場会社に適用される上場適格性要件及び適時開示基準並びに市場価格の変動に関するリスクに留意し、自らの責任で投資を行う必要があります。また、投資者は、発行者情報により公表された情報を慎重に検討した上で投資判断を行う必要があります。特に、「第一部 第3 4【事業等のリスク】」において公表された情報を慎重に検討する必要があります。
2. 発行者情報を公表した発行者のその公表の時ににおける役員(金融商品取引法(以下「法」という。)第21条第1項第1号に規定する役員(取締役、会計参与、監査役若しくは執行役又はこれらに準ずる者)をいう。)は、発行者情報のうちに重要な事項について虚偽の情報があり、又は公表すべき重要な事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実に関する情報が欠けていたときは、法第27条の34において準用する法第22条の規定に基づき、当該有価証券を取得した者に対し、情報が虚偽であり又は欠けていることにより生じた損害を賠償する責任を負います。ただし、当該有価証券を取得した者がその取得の申込みの際に、情報が虚偽であり、又は欠けていることを知っていたときは、この限りではありません。また、当該役員は、情報が虚偽であり又は欠けていることを知らず、かつ、相当な注意を用いたにもかかわらず知ることができなかったことを証明したときは、上記賠償責任を負いません。
3. TOKYO PRO Marketにおける取引所規則の枠組みは、基本的な部分において日本の一般的な取引所金融商品市場に適用される取引所規則の枠組みと異なっています。すなわち、TOKYO PRO Marketにおいては、J-Adviserが重要な役割を担います。TOKYO PRO Marketの上場会社は、特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例(以下「特例」という。)に従って、各上場会社のために行動するJ-Adviserを選任する必要があります。J-Adviserの役割には、上場適格性要件に関する助言及び指導、並びに上場申請手続のマネジメントが含まれます。これらの点について、投資者は、東京証券取引所のホームページ等に掲げられるTOKYO PRO Marketの諸規則に留意する必要があります。
4. 東京証券取引所は、発行者情報の内容(発行者情報に虚偽の情報があるか否か、又は公表すべき事項若しくは誤解を生じさせないために必要な重要な事実に関する情報が欠けているか否かという点を含みますが、これらに限られません。)について、何らの表明又は保証等をしておらず、前記賠償責任その他の一切の責任を負いません。

第一部 【企業情報】

第1 【本国における法制等の概要】

該当事項はありません。

第2 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

回次	第11期	第12期	第13期	第14期 (中間)
決算年月	2020年1月	2021年1月	2022年1月	2022年7月
売上高 (千円)	1,562,550	1,781,853	2,023,340	1,386,494
経常利益又は経常損失(△) (千円)	△ 3,512	12,913	△ 42,921	19,595
当期(中間)純利益又は 当期純損失(△) (千円)	1,902	7,059	△ 32,678	11,095
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	-	-	-	-
資本金 (千円)	1,000	1,000	1,000	1,000
発行済株式総数 (株)	20	20	20	20
純資産額 (千円)	235,757	250,818	218,057	229,249
総資産額 (千円)	1,410,607	1,341,087	1,568,502	1,934,003
1株当たり純資産額 (円)	5,893.93	6,270.45	5,451.43	5,731.24
1株当たり配当額 (うち、1株当たり中間配当額) (円)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
1株当たり当期(中間)純利益 又は当期純損失(△) (円)	47.55	176.47	△816.95	277.38
潜在株式調整後1株当たり 当期(中間)純利益 (円)	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	16.7	18.7	13.9	11.9
自己資本利益率 (%)	0.8	2.8	△15.0	4.8
株価収益率 (倍)	-	-	-	-
配当性向 (%)	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△ 89,432	302,138	△ 371,895	△ 9,153
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△ 65,813	△ 26,137	△ 14,577	△ 68,451
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	152,442	△ 127,520	325,527	257,072
現金及び現金同等物の中間期末(期 末)残高 (千円)	34,572	183,053	122,107	301,576
従業員数 (名)	13 (4)	18 (7)	25 (11)	28 (8)

- (注) 1. 当社は連結財務諸表及び中間連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度又は中間連結会計期間に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。
2. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第14期の期首から適用しており、第14期の中間会計期間に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。
3. 持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社が存在しないため記載しておりません。
4. 1株当たり配当額及び配当性向については、配当を行っていないため、記載しておりません。
5. 潜在株式調整後1株当たり当期(中間)純利益については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
6. 株価収益率は当社株式が非上場であるため記載しておりません。
7. 従業員数は就業人員数であり、臨時雇用者数は期中の平均人員を()外数で記載しております。
8. 第11期および第12期の財務諸表については、かがやき監査法人による監査は受けておりません。
9. 第13期の財務諸表については、株式会社東京証券取引所の特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第5項の規定に基づき、かがやき監査法人により監査を受けております。また、第14期(中間)

の中間財務諸表については、株式会社東京証券取引所の特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条の第5項の規定に基づき、かがやき監査法人の中間監査を受けております。

10. 当社は、2023年1月31日付で普通株式1株につき2,000株の株式分割を行っております。第11期の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期（中間）純利益又は当期純損失（△）を算定しております。

2 【沿革】

当社は、代表取締役社長である中山耕一が、2009年に不動産の売買仲介をはじめとして創業しました。
2012年5月に1棟目の名古屋市中区の賃貸事業用自社保有ビルを取得後、2011年不動産買取再販を皮切りに不動産賃貸仲介等を展開し、事業拡大により2019年12月に現在の名古屋市中区大須4丁目11番5号Z'sビル9階へ移転、2022年2月に同ビル8階への拡張をしております。

年 月	沿 革
2009年2月	資本金百万円にて不動産の売買仲介を目的として、愛知県名古屋市熱田区にて中山不動産株式会社設立。
2011年4月	名古屋市中区に事務所移転。 不動産買取再販を開始。
2014年3月	収益不動産の販売（デザイナーズアパート）開始。
2019年12月	名古屋市中区大須4丁目11番5号Z'sビル9階に移転。 不動産賃貸仲介を開始。
2021年4月	求職者支援訓練事業を開始。

3 【事業の内容】

当社は、「総合不動産企業として新しい価値を生み出し「未来」を創造していきます。」の理念に基づき、地域密着企業として、名古屋市を中心とした東海3県(愛知県、岐阜県、三重県)を商圏とした不動産業を行っております。

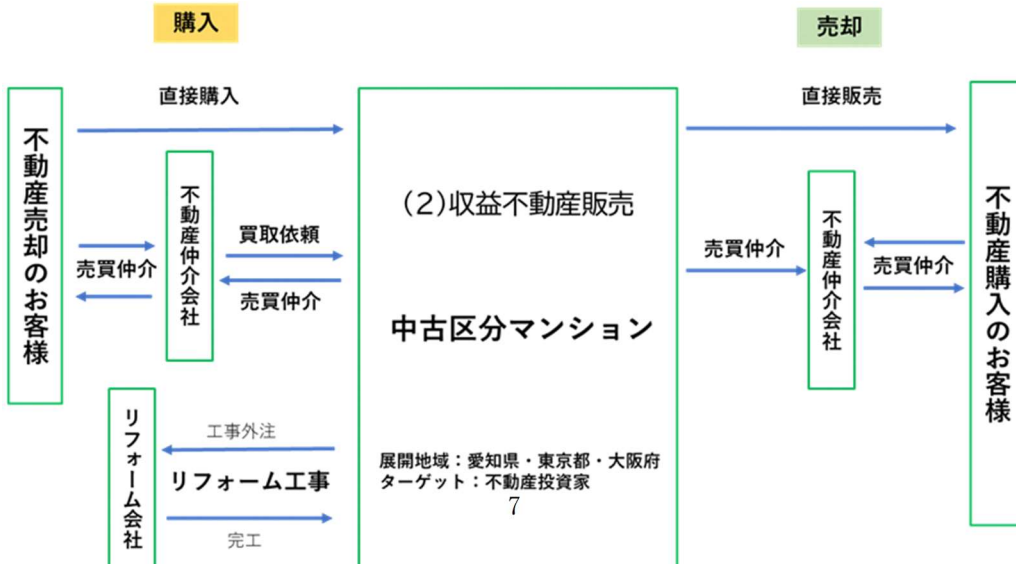
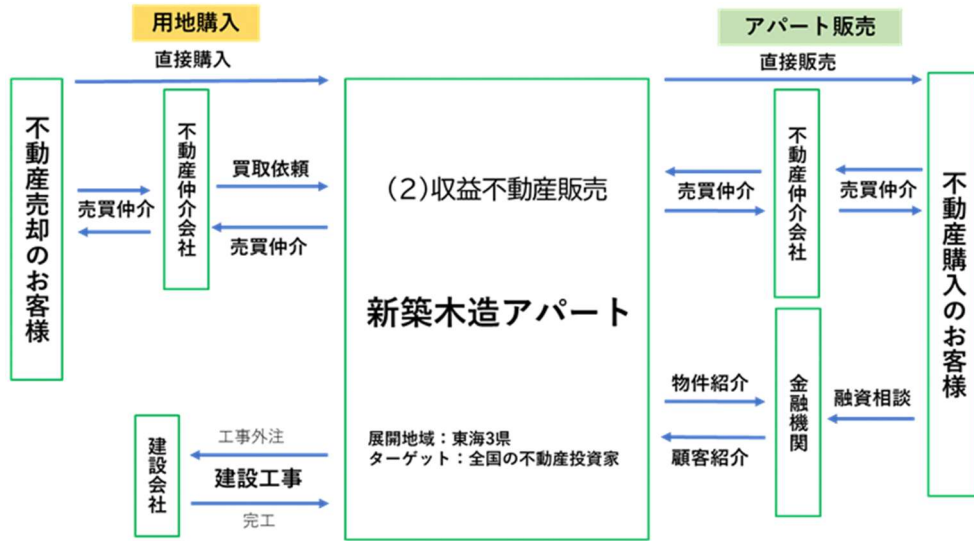
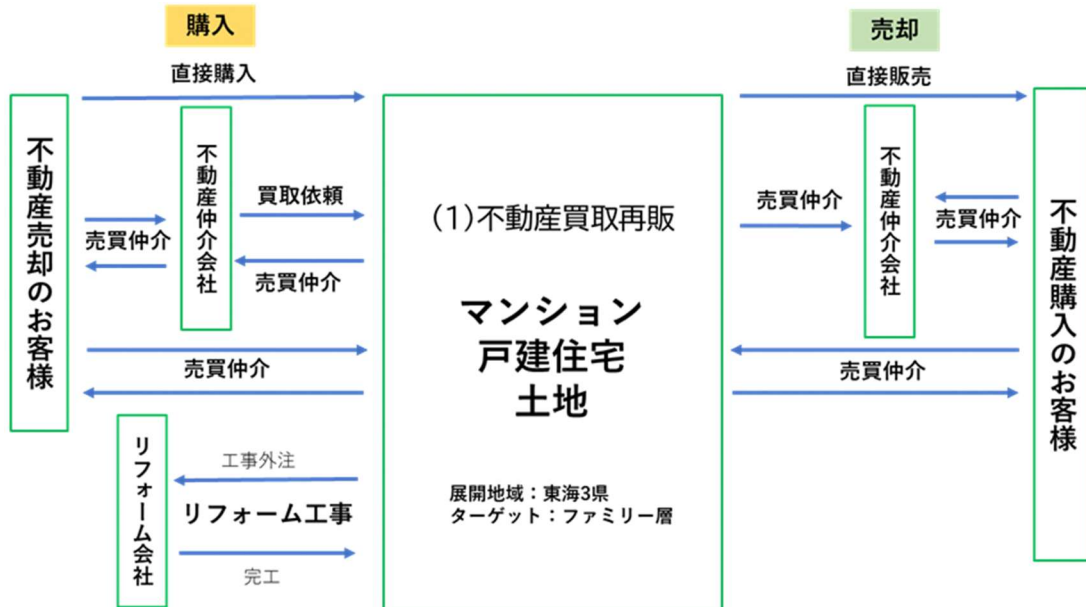
当社は不動産事業として、単一セグメントではありますが、以下当社の事業の種別について説明いたします。

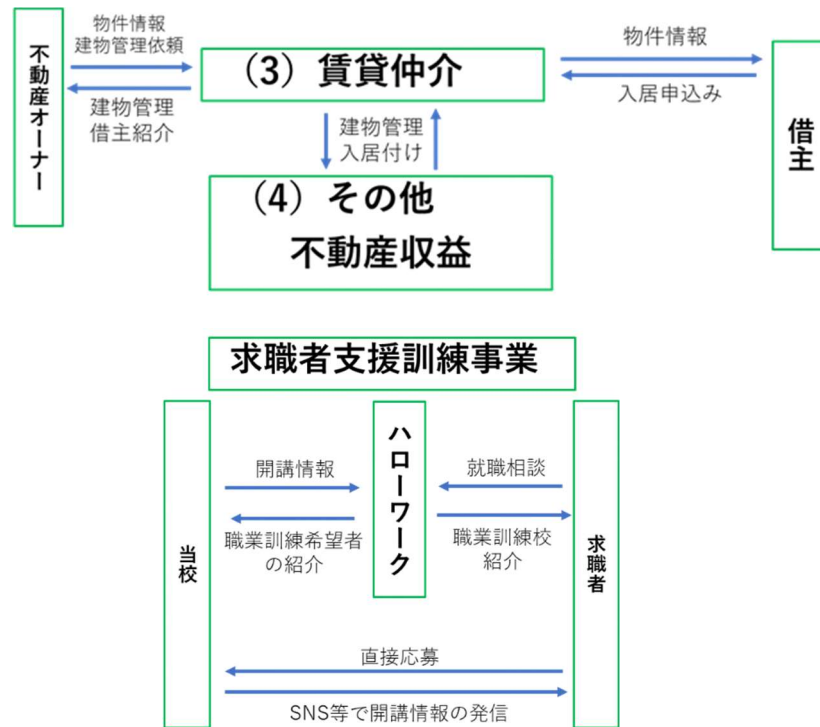
事業の種別	区分	商品・サービスの内容
不動産事業	(1)不動産買取再販	リノベーション住宅及び土地の販売、売買仲介
	(2)収益不動産販売	投資家向けの新築アパート及び中古区分所有マンションの販売
	(3)賃貸仲介	賃貸仲介、賃貸管理業
	(4)その他	自社保有不動産の賃貸
その他	求職者支援訓練事業	求職者支援制度に基づく認定職業訓練の教室運営等

- (1) 不動産買取再販では、中古マンション・戸建住宅の仕入れは不動産仲介業者を通じて行い、内装は外注にて新築同様のフルリノベーションを施工して、付加価値を高め、周辺物件の販売相場に見合う価格で不動産仲介業者を介して、住宅の購入を検討されている東海3県の単身者及びファミリー層のお客様に対して販売を行っております。また、自社物件だけでなく市場にある物件の不動産仲介業務も行っております。
- (2) 収益不動産販売では、投資家向け収益不動産として東海3県の1棟アパートや収益性の高い区分所有マンション等多様化するニーズに応える事業を行っております。1棟アパートについては、不動産仲介からの仲介顧客に加え、主なターゲットである既に収益不動産を保有している投資家に向けて、DM等にて物件内覧会の案内を行っております。なお、土地の仕入れについては、不動産仲介会社を介して行い、外注にて建設工事を実施しております。区分所有マンションについては、不動産仲介業者を通じて仕入れを行い、自社メディアにて募集している相談会などで集客した新たに不動産投資を始める方や少額にて不動産投資を行う方を対象に販売をしております。
- (3) 賃貸仲介では、ポータルサイトを通じて名古屋市内で賃貸用住宅を探している方に賃貸住宅の仲介や入居後も外部サービスと連携して、24時間緊急駆けつけ等の付帯サービスを行っております。また、収益不動産販売の1棟アパートの入居者募集や賃料の集金・送金・更新・入居者の苦情相談等の管理業務を行っております。
- (4) その他として、当社所有のビルや区分マンションの入居者から賃料を得ております。
- (5) 求職者支援訓練事業では、求職者支援訓練校などの運営を行っております。

[事業系統図]

当社の事業系統図を示すと下記のとおりであります。





4 【関係会社の状況】

該当事項はありません。

5 【従業員の状況】

(1) 発行者の状況

2023年1月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
30(8)	38.2	2.1	3,416

- (注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は、期中の平均人員を () 外数で記載しております。
 2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金並びに諸費用を含んでおります。
 3. 平均年間給与には、臨時従業員の給与は含まれておりません。

(2) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第3 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

(1) 業績

第13期事業年度（自 2021年2月1日 至 2022年1月31日）

当事業年度における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態宣言解除を受け、少しずつ経済活動が再開されたものの、感染症終息時期は見通せず依然として厳しい経済環境のまま推移しました。

当業界における不動産事業を取り巻く環境につきましては、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う経済活動停滞による影響が懸念されます。また、投資用不動産市場においては、新型コロナウイルス感染症の収束時期が見通せない中、当面は投資家の慎重な姿勢が続くと見られますが、中長期的には安定したリターンが見込まれる不動産投資商品への期待は大きく、経済活動が正常化に向かう動機を見据えながらマーケットのファンダメンタルズの変化を慎重に見極めていく必要があります。

当社は、総合不動産として市場の変化に合わせた販売方法や商品開発を進めるとともに、求職者支援訓練等の不動産以外の事業も展開する事で、長期的かつ安定的な収入を獲得できるようなスキームを構築し、不動産市場の動向が当社の財政状態および経営成績に及ぼす影響を少なくするよう細心の注意を払っております。

こうした環境のもと、当社では、当事業年度から不動産買取再販を核としたビジネスモデルに加えて収益不動産の販売及び求職者支援訓練校など幅広い事業展開を行い、永続的な企業価値の増大を遂げることに注力いたしました。一方、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う経済活動停滞、ウッドショックによる原材料高騰の影響等により売上及び売上総利益の伸びが鈍化し、上場および事業拡大に向けた管理部門や営業部門の人員体制強化による人件費や体制強化のためのコンサル費用等を吸収できず、当事業年度は営業損失および経常損失という結果となりました。今後は、安定した事業基盤を活かし成長を遂げる企業を目指し、新しい観点で業務に取り組み企業価値の一層の向上に邁進してまいります。

これらの結果、売上高は2,023,340千円(前年同期比13.6%増加)、営業損失は38,772千円(前年同期は営業利益21,625千円)、経常損失は42,921千円(前年同期は経常利益12,913千円)、当期純損失は32,678千円(前年同期は当期純利益7,059千円)となりました。

第14期中間会計期間（自 2022年2月1日 至 2022年7月31日）

当中間会計期間における我が国経済は、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種が進み新型コロナウイルス感染者数も減少し、社会経済活動の制限が緩和され景気回復の兆しが見えてきたところに新たな変異株の出現により再拡大に転じ、原油価格や原材料価格の上昇が個人消費に与える影響、加えてウクライナ情勢の緊迫化による輸入停滞の拡大懸念など、依然として先行き不透明な状況が続いております。

当業界における不動産事業を取り巻く環境につきましては、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う経済活動停滞による影響が懸念されます。また、投資用不動産市場においては、新型コロナウイルス感染症の収束時期が見通せない中、当面は投資家の慎重な姿勢が続くと見られますが、中長期的には安定したリターンが見込まれる不動産投資商品への期待は大きく、経済活動が正常化に向かう動機を見据えながらマーケットのファンダメンタルズの変化を慎重に見極めていく必要があります。

当社は、総合不動産として市場の変化に合わせた販売方法や商品開発を進めるとともに、求職者支援訓練等の不動産以外の事業も展開する事で、長期的かつ安定的な収入を獲得できるようなスキームを構築すると

共に、対象不動産の選定を精緻に行うこと等により、不動産市場の動向が当社の財政状態および経営成績に及ぼす影響を少なくするよう細心の注意を払っております。

こうした環境のもと、当社では、不動産買取再販を核としたビジネスモデルに加えて収益不動産の販売及び求職者支援訓練校など幅広い事業展開を行い、前事業年度から引き続き永続的な企業価値の増大を遂げることに注力いたしました。また、新型コロナウイルス感染症対策と社会経済活動により正常化が進む中、営業活動を再び活発化させると共に、収益不動産の販売ではウッドショックに伴う原材料費の価格高騰に対して価格転嫁を始めました。今後は、安定した事業基盤を活かし成長を遂げる企業を目指し、新しい観点で業務に取り組み企業価値の一層の向上に邁進してまいります。これらの結果、売上高は1,386,494千円、営業利益は6,854千円、経常利益は19,595千円、中間純利益は11,095千円となりました。なお、当中間会計期間は中間財務諸表の作成初年度であるため、前年同期との比較分析は行っておりません。

(2) キャッシュ・フローの状況

第13期事業年度（自 2021年2月1日 至 2022年1月31日）

当事業年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」といいます。）の残高は122,107千円（前期末比60,945千円減少）となりました。各キャッシュ・フローの状況と主な要因は以下のとおりです。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果使用した資金は371,895千円となりました。これは主に販売用不動産の増加331,156千円、仕入債務の減少64,520千円、税引前当期純損失37,396千円等によるものです。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は14,577千円となりました。これは主に本社事務所拡張及び求職者支援事業開始に伴う設備投資を目的とした有形固定資産の取得による支出43,270千円、定期預金の払戻しによる収入93,701千円、定期預金の預入による支出67,501千円等によるものです。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果獲得した資金は325,527千円となりました。これは主に短期借入れによる収入1,451,006千円及び短期借入金の返済による支出1,119,256千円等によるものです。

第14期中間会計期間（自 2022年2月1日 至 2022年7月31日）

当中間会計期間末における現金及び現金同等物（以下「資金」といいます。）の残高は301,576千円となりました。各キャッシュ・フローの状況と主な要因は以下のとおりです。なお、当中間会計期間は中間財務諸表の作成初年度であるため、前年同期との比較分析は行っておりません。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果使用した資金は9,153千円となりました。これは主に税引前中間純利益19,595千円等による資金獲得はありましたが、アパート物件の在庫拡充による仕掛販売用不動産の増加103,382千円等による資金使用によるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は68,451千円となりました。これは主に定期預金の預入による支出26,398千円、定期積金の預入による支出16,101千円及び求職者支援事業のパソコンやアパート関連等の有形固定資産の取得による支出14,750千円等によるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果獲得した資金は257,072千円となりました。これは主に社債の発行による収入98,053千円や物件購入に伴う短期借入れによる収入1,025,450千円及び短期借入金の返済による支出916,050千円等によるものです。

2 【生産、受注及び販売の状況】

当社は不動産買取再販・賃貸仲介・収益不動産販売を主体とする不動産事業を行っており単一セグメントであるため、セグメント別の記載に代えて記載しております。

(1) 生産実績

不動産事業は生産の形態をとらないため、該当事項はありません。

(2) 受注実績

不動産事業は受注の形態をとらないため、該当事項はありません。

(3) 販売実績

第13期事業年度における販売実績は、次のとおりであります。

事業の種別	販売高(千円)	前年同期比(%)
不動産事業 (千円)	2,001,688	12.6
その他 (千円)	21,652	476.0
合計 (千円)	2,023,340	13.6

(注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

2. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合については、総販売実績に対する割合が10%以上の相手先が存在しないため、記載を省略しております。

第14期中間会計期間における販売実績は、次のとおりであります。

事業の種別	販売高(千円)	前年同期比(%)
不動産事業 (千円)	1,353,947	-
その他 (千円)	32,547	-
合計 (千円)	1,386,494	-

第14期中間会計期間の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)	
	金額 (千円)	割合 (%)
株式会社ライフアシスト	141,866	10.2

3 【対処すべき課題】

当社は、中期的な成長の観点から、下記の課題に取り組む必要があると考えております。

(1) 不動産事業の強化について

競合他社が増えていく中、当社の事業の中心を実需向けの不動産買取再販からリピートが見込める収益不動産販売にシフトし、収益不動産販売の売上比率を5割まで高める方針であります。収益不動産販売の強化をするにあたり、販売エリアの拡大、仕入れ時の明確な判断基準の設定、経験豊富な営業人員の確保や社内教育の充実を図っております。また、新築1棟アパートに加えて、中古1棟アパート、中古1棟マンション等の商品ラインナップを増やし、更に収益不動産仲介を手掛けていきます。収益区分所有マンションでは販売エリアを拡大（東京、大阪等）し、幅広い不動産投資家のニーズに応じていきます。

(2) 内部管理体制の強化について

当社は、比較的小規模な組織であるため、継続的な成長を実現できる企業体質を確立する必要があります。そのため、リスク管理や業務運営管理をはじめとする内部管理体制の強化が重要な課題であると認識しております。今後の企業規模拡大に備え、各部門の内部管理体制の整備と適切な運用を推進し、経営の公正性及び透明性を確保するため、体制強化に取り組んでおります。

(3) 事業資金確保について

不動産事業には投資が必要であり、当社はこれらの投資資金の多くを金融機関からの借入により調達してまいりました。事業資金の確保のため、多様な資金調達の手段を確保することで、中長期的に安定した成長が可能な財務体質の強化を図ってまいります。

(4) 法的規制について

当社は、不動産事業を展開しており、遵守すべき法令・規制は宅地建物取引業法となります。従って、宅地建物取引業者として「宅地建物取引業法」に基づく免許を受けて事業を行っております。

そのため当社では法令遵守を徹底し、免許等の取消事由や更新欠格事由が発生しないように努めております。

(5) 人材の確保・育成について

当社では、人材が重要な経営資源と考えており、事業の拡大に向け優秀な人材の確保及び教育・研修制度の充実が重要な課題と考えております。

4 【事業等のリスク】

以下において、当社の事業展開その他に関してリスク要因と考えられる主な事項を記載しております。

当社は、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の適切な対応に努める方針ですが、当社株式に関する投資判断は、以下の事項及び本項以外の記載事項を慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。また、文中の将来に関する事項は、本発行者情報公表日現在において当社が判断したものであり、実際の結果とは異なる可能性があります。

(1) 事業環境に関するリスク

① 景気動向や不動産市況の影響について

当社の事業は、景気動向、金利動向、地価動向及び税制等に基づく購買者の購入意欲や需要動向に影響を受けやすいため、景気の先行き悪化や大幅な金利の上昇、地価の上昇、住宅税制・消費税増税等の動向に大きく左右される傾向があります。そのため、当社では、不動産査定及び不動産営業において豊富な経験と高い専門知識を持った人材を多く有しており、不動産にかかるリスクの軽減と同時に、収益の極大化を図ることができるよう市況の動きに注意を払っておりますが、不動産市況が当社の予測を超え、想定した以上の資産価値の下落を生じるような事態になった場合、これらの動向次第で当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

② 不動産関連税制の変更について

現在、国策として住宅の取得を推進しているため、不動産取得税の税率軽減措置や固定資産税の負担調整措置等の税負担の軽減措置が講じられております。しかしながら、上記の税負担の軽減措置が行われなくなった場合や不動産関連税制や所得税関連等の税制が変更された場合に、不動産取得・売却時のコストの増加、また住宅購入顧客の購買意欲、賃貸住宅オーナー等の事業意欲の減退等により、当社の事業、業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

③ 有利子負債への依存、資金調達について

不動産事業には多額の投資が必要であり、当社は、これら投資資金の大部分を金融機関からの借入金に依存してきました。第13期事業年度末における当社の総資産に占める有利子負債の割合は82%、支払利息は23,071千円となっております。今後の金利変動によっては、支払利息の負担が増加して経営成績に影響を与える可能性があります。今後におきましては、資金調達手段の多様化に積極的に取り組むことにより自己資本の充実に注力する方針であります。しかしながら、金融機関の融資姿勢の変化等により、事業拡大に必要な資金調達が困難になる場合には、当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

④ 感染症等の影響について

新型コロナウイルス感染症等の治療法が確立されていない感染症が流行するなどした結果、消費マインドの冷え込みによる長期的な景気悪化などが生じた場合には、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。本発行情報公表日現在、新型コロナウイルス感染症拡大により、日本経済レベルだけでなく世界経済レベルにおいても多大な影響が発生しております。当社では、社内インフラの整備や出勤時の体温チェック等で防止を図りつつ、感染や感染疑いが生じた場合の対応手順を定め、周知徹底することでリスクに備えております。しかしながら、今後、さらなる感染拡大により、株価の低迷、不動産需要の低下、企業収益の悪化、個人消費の低迷等を引き起こす可能性があり、今後の新型コロナウイルスによる影響については、注視が必要であります。

(2) 不動産事業に関するリスク

① 競合及び価格競争について

当社が扱う中古住宅及び投資用物件は愛知県及び東海3県を中心に展開しております。愛知県及び東海3県の中古住宅及び投資用物件は、一般的に需要が高いため大小様々な競合他社が多数存在しております。しかしながら、当社は、競合他社や顧客ニーズの動向を的確に把握し、魅力的な商品(間取り、デザイン、価格バ

ランスの良い商品等)の充実等に努めること等により、時々状況に応じた柔軟な仕入及び営業活動を行うことで、リスクの低減に努めておりますが、競合他社の動向によっては価格競争等が生じる場合には、事業計画の遂行に問題が生じ、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

② 個人情報の管理について

当社が行っている不動産事業において、事業上の重要情報、顧客・取引先等の機密情報や個人情報等を保有しております。これらの情報の外部への不正な流出、漏洩を防止するために、社内研修を通じて社員への啓蒙活動を継続的に実施するなどの施策を講じております。また、管理体制やシステムのセキュリティ対策の強化にも努めております。しかしながら、万が一、当社グループが保有する個人情報等が、サイバー攻撃、不正アクセス、コンピューターウイルスの侵入等により社外に漏えいしてしまった場合には当社グループの信用が失墜し、また、損害賠償による損失が発生した場合には当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

③ 物件の売却時期による業績の変動について

当社の不動産販売の売上計上方法は、売買契約を締結した時点ではなく、物件の引渡しを行った時点で計上する引渡基準によっております。そのため、販売用不動産1件あたりの販売規模が比較的大きいことから、物件の工事進捗状況及び物件販売計画の変更(個別物件の利益率等)等による引渡時期の変更が、当社の業績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。また、一取引あたりの金額が高額な物件も取り扱っており、当該物件の売却時期が変更された場合、当社の業績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

④ 外注業務について

当社では、アパート建築工事及び取得した中古住宅のリノベーション工事の多くを外部工事業者に外注しており、これによって人件費等の固定費の増加を抑制し、一定の利益水準を確保することを見込んでおります。しかしながら、工事の多くを外注先に依存しているため、今後、仕入件数の増加に伴いそれに見合う外注先を十分に確保できなかった場合、外注先の経営不振や繁忙期等により工期の遅延、労働者の不足に伴い外注価格が上昇する等の場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

⑤ 自然的・人為的災害及び特定地域に対する依存等について

現在、当社は東海3県に販売用不動産、ならびに収益不動産を保有しておりますが、地震・火災・水害等の自然的災害、大規模な事故やテロ等の人為的災害が発生した場合、あるいは同地域に特定した経済的ダメージが発生し、経済環境が悪化する可能性があります。当社では、販売地域を分散することで、災害リスクの分散を図っております。また、原則として、当社が保有する不動産については火災保険を付保しており、不測の事態に備えております。しかしながら、それらが滅失、毀損又は劣化し、販売価値や賃貸収入が著しく減少した場合には、当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

⑥ 販売用不動産の仕入れおよび工事原価について

当社は、東海3県の物件を中心に相場よりも安く不動産を仕入れております。しかしながら、当社がコントロールできない外部要因により、仕入価格が高騰する可能性があります。また、当社が提供しているアパート物件は、木材・建材その他の原材料を使用しております。これらの原材料の価格高騰や為替相場の変動、建築業界における人材不足等を背景とした人件費が高騰等によるコストの上昇を販売価格に転嫁することが難しい場合には、当社の業績に重大な悪影響を与える可能性があります。

⑦ 在庫リスクについて

当社が行っております事業は、自社商業エリアにおいて需要予測、近隣地域環境、お客様のニーズ等を慎重に分析調査を行ったうえで、中古住宅や建築用地を低価格で仕入れ、物件を企画し、短期間で販売するよう努めております。

しかしながら、景気動向、金利動向、地価動向及び税制等の急激な変化等に伴う金融機関の融資動向や消費者動向次第で、当社の計画遂行が困難となり、完成在庫の増加、造成・開発期間の遅延及び棚卸資産の評価損が発生する可能性があり、その場合には当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

⑧ 契約不適合責任について

当社では、中古住宅や建築用地を購入する際、お客様に提供する物件について品質管理には万全を期しておりますが、売主がその契約不適合(契約の内容に適合しないもの)の責任を負担できない場合や、販売を行った物件に重大な瑕疵があるとされた場合には、直接的な原因が当社以外の責任によるものであったとしても、売主としての瑕疵担保責任を負う可能性があり当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

⑨ 資産価値の下落による影響について

当社は、「棚卸資産の評価に関する会計基準(企業会計基準第9号 2019年7月4日 企業会計基準委員会)」及び「固定資産の減損に係る会計基準(平成14年8月9日 企業会計審議会)」を適用しております。当社は、不動産市況動向を常に確認し事業活動を行っており、動向に合わせた仕入を適切に行うよう努めております。しかしながら、経済情勢や不動産市況の悪化による不動産価格の急激な変動等により、事業計画の遂行に重大な問題が生じ、販売価格の引き下げ等が発生する恐れがあります。また、販売用不動産の滞留期間が長期化した場合等は、当社の棚卸資産及び固定資産について、その資産価値が下落した場合、棚卸資産の簿価切下げもしくは固定資産の減損が発生し、当社の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 組織体制について

① 特定人物への依存について

当社では、役員及び幹部社員への情報共有や権限の移譲を進め、創業者である代表取締役社長中山耕一に過度に依存しないような経営体制の整備やノウハウの共有、人材の獲得及び育成等により組織体制の強化を図り、同氏に過度に依存しない経営体制の構築を進めてまいります。しかしながら、不測の事態により同氏の当社における職務執行が困難となった場合は、当社の今後の事業展開、業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

② 人材の確保・育成について

当社では、人材が重要な経営資源と考えており、事業の拡大に向け優秀な人材の確保及び教育・研修制度の充実が重要な課題となります。しかしながら、今後、計画通りに採用が進まなかった場合においては、事業展開が計画通りに進まず、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

③ 小規模企業組織であることについて

当社は、小規模な組織であると認識しており、内部管理体制も当該組織規模に応じたものとしております。一方で、安定的な事業運営を行うため、欠員が生じた場合でも支障が生じないよう、マニュアル整備等の対応などの対策を講じてまいりました。今後の事業拡大を目指していく上で、事業推進に適応した優秀な人材の拡充並びに組織体制の強化が必要であることは認識しており、当社はこの認識のもと、積極的に優秀な人材を採用していく方針へと転換しておりますが、当社の求める人材が適時に確保できない場合や組織的対応及び管理体制の強化が順調に進まない場合は、事業遂行及び拡大に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 訴訟等について

当社が取扱う不動産において、瑕疵等の発生、工事期間中における近隣からのクレーム等が発生した場合、

これらに起因する訴訟やその他の請求が発生する可能性もあります。これらの訴訟等の内容によっては、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 法的規制について

当社が属する不動産業界は、宅地建物取引業法、建築基準法、都市計画法、国土利用計画法、借地借家法等の不動産取引や建築に関する多数の法令及び条例等の法的規制があります。当社の事業運営において、これら多数の法的規制に対応できる体制を構築しておりますが、今後、これらの法的規制の大幅な変更等により、当社の事業運営に影響を及ぼす可能性があります。なお、当社の主要な業務である不動産事業に係る免許等の許認可について、その有効期限やその他の期限が法令、契約書により定められているものは以下のとおりです。現時点において各種免許や許認可の取消事由や更新欠格事由は発生しておりませんが、今後何等かの事情により、免許、許可及び登録の取り消し処分が発生した場合には、事業活動に大きく影響し、財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

許認可の名称	許認可番号	有効期限	取消事項
宅地建物取引業免許	愛知県知事（3） 第21327号	自 2019年3月31日 至 2024年3月30日	宅地建物取引業法 第66条
賃貸住宅管理業登録	国土交通大臣（01） 第008739	自 2022年12月14日 至 2027年12月15日	賃貸住宅管理業法 第23条

(6) 大株主の存在について

本発行者情報公表日現在、筆頭株主である当社の代表取締役社長中山耕一が当社の発行済株式総数の100%を占めており、中長期的な安定株主として当社株式を保有しており、当社株式を売却する場合には可能な限り市場動向に配慮しながら行う旨、確認しております。しかしながら、将来的に当社株式が売却された場合、当社株式の市場価格や流通状況に影響を及ぼす可能性があります。

なお、当社が当社取締役と取引を行う場合は、取引条件の妥当性、当該取引の合理性を検討した上で取締役会の承認を得ることとしており、取引の適正性を確保する体制を築いております。

(7) 担当J-Adviserとの契約の解除に関するリスクについて

当社は、株式会社東京証券取引所が運営を行っております証券市場TOKYO PRO Marketに上場予定です。

当社は、本書公表日現在において、株式会社日本M&Aセンターとの間で、担当J-Adviser契約（以下、「当該契約」といいます。）を締結しております。当該契約は、TOKYO PRO Marketにおける当社株式の新規上場及び上場維持の前提となる契約であり、当該契約を解除し、かつ、他の担当J-Adviserを確保できない場合、当社株式はTOKYO PRO Marketから上場廃止となります。当該契約における契約解除に関する条項及び契約解除に係る事前催告に関する事項は以下のとおりです。

なお、本書公表日現在において、当該契約の解除条項に該当する事象は生じておりません。

<J-Adviser契約解除に関する条項>

当社（以下、「甲」という。）が次のいずれかに該当する場合には、株式会社日本M&Aセンター（以下、「乙」という。）はJ-Adviser契約（以下、「本契約」という。）を即日無催告解除することができる。

甲が次のいずれかに該当する場合には、乙は本契約を即日無催告解除することができる。

① 債務超過

甲がその事業年度の末日に債務超過の状態である場合において、1年以内（審査対象事業年度の末日の翌日から起算して1年を経過する日（当該1年を経過する日が甲の事業年度の末日に当たらないときは、当該1年を経過する日の後最初に到来する事業年度の末日）までの期間をいう。以下、本号において同じ。また「2年以内」も同様。）に債務超過の状態でなくならなかったとき。ただし、甲が法律の規定に基づく再生手続若しくは更生手続、産業活力の再生及び産業活動の革新に関する特別措置法（以下、「産活法」という。）第2条第25項に規定する特定認証紛争解決手続に基づく事業再生（当該手続が実施された場合における産活法第49条に規定する特例の適用を受ける特定調停手続による場合も含む。）、産業競争力強化法第2条第16項に規定する特定認証紛争解決手続に基づく事業再生（当該手続が実施された場合における産業競争力強化法第52条に規定する特例の適用を受ける特定調停手続による場合も含む。）又は私的整理に関するガイドライン研究会による「私的整理に関するガイドライン」に基づく整理を行うことにより、当該1年を経過した日から起算して1年以内に債務超過の状態でなくなることを計画している場合（乙が適当と認める場合に限る。）には、2年以内に債務超過の状態でなくならなかったとき。

なお、乙が適当と認める場合に適合するかどうかの審査は、甲が審査対象事業年度に係る決算（上場会社が連結財務諸表を作成すべき会社である場合には連結会計年度、連結財務諸表を作成すべき会社でない場合には事業年度に係る決算とする。）の内容を開示するまでの間において、再建計画（本号但し書に定める1年以内に債務超過の状態でなくなるための経営計画を含む。）を公表している場合を対象とし、甲が提出する当該再建計画並びに次の（a）及び（b）に定める書面に基づき行うものとする。

（a）次のイからハまでに掲げる場合の区分に従い、当該イからハまでに定める書面

イ 法律の規定に基づく再生手続又は更生手続を行う場合 当該再建計画が、再生計画又は更生計画として裁判所の認可を得ているものであることを証する書面

ロ 産活法第2条第16項に規定する特定認証紛争解決手続に基づく事業再生（当該手続が実施された場合における産活法第52条に規定する特例の適用を受ける特定調停手続による場合も含む。）を行う場合 当該再建計画が、当該手続にしたがって成立したものであることを証する書面

ハ 私的整理に関するガイドライン研究会による「私的整理に関するガイドライン」に基づく整理を行う場合 当該再建計画が、当該ガイドラインにしたがって成立したものであることについて債権者が記載した書面

（b）規程第311条第1項第5号ただし書に規定する1年以内に債務超過の状態でなくなるための経営計画の前提となった重要な事項等が、公認会計士等により検討されたものであることについて当該公認会計士等が記載した書面

② 銀行取引の停止

甲が発行した手形等が不渡りとなり銀行取引が停止された場合又は停止されることが確実となった場合。

③ 破産手続、再生手続又は更生手続

甲が法律の規定に基づく会社の破産手続、再生手続若しくは更生手続を必要とするに至った場合（甲が、法律に規定する破産手続、再生手続又は更生手続の原因があることにより、破産手続、再生手続又は更生手続を必要と判断した場合）又はこれに準ずる状態になった場合。なお、これに準ずる状態になった場合とは、

次の a から c までに掲げる場合その他甲が法律の規定に基づく会社の破産手続、再生手続又は更生手続を必要とするに至った場合に準ずる状態になったと乙が認めた場合をいうものとし、当該 a から c までに掲げる場合には当該 a から c までに定める日に本号前段に該当するものとして取り扱う。

- a 甲が債務超過又は支払不能に陥り又は陥るおそれがあるときなどで再建を目的としない法律に基づかない整理を行う場合 甲から当該整理を行うことについての書面による報告を受けた日
- b 甲が、債務超過又は支払不能に陥り又は陥るおそれがあることなどにより事業活動の継続について困難である旨又は断念する旨を取締役会等において決議又は決定した場合であって、事業の全部若しくは大部分の譲渡又は解散について株主総会又は普通出資者総会に付議することの取締役会の決議を行った場合 甲から当該事業の譲渡又は解散に関する取締役会の決議についての書面による報告を受けた日（事業の大部分の譲渡の場合には、当該事業の譲渡が事業の大部分の譲渡であると乙が認めた日）
- c 甲が、財政状態の改善のために、債権者による債務の免除又は第三者による債務の引受若しくは弁済に関する合意を当該債権者又は第三者と行った場合（当該債務の免除の額又は債務の引受若しくは弁済の額が直前事業年度の末日における債務の総額の100分の10に相当する額以上である場合に限り。） 甲から当該合意を行ったことについての書面による報告を受けた日

④ 前号に該当することとなった場合においても、甲が次の a から c までに該当する再建計画の開示を行った場合には、原則として本契約の解除は行わないものとする。

- a 次の（a）又は（b）に定める場合に従い、当該（a）又は（b）に定める事項に該当すること。
 - （a）甲が法律の規定に基づく再生手続又は更生手続を必要とするに至った場合 当該再建計画が、再生計画又は更生計画として裁判所の認可を得られる見込みがあるものであること。
 - （b）甲が前号 c に規定する合意を行った場合 当該再建計画が、前号 c に規定する債権者又は第三者の合意を得ているものであること。
- b 当該再建計画に次の（a）及び（b）に掲げる事項が記載されていること。
 - （a） TOKYO PRO Marketに上場する有価証券の全部を消却するものでないこと。
 - （b） 前 a の（a）に規定する見込みがある旨及びその理由又は同（b）に規定する合意がなされていること及びそれを証する内容
- c 当該再建計画に上場廃止の原因となる事項が記載されているなど公益又は投資者保護の観点から適当でないと認められるものでないこと。

⑤ 事業活動の停止

甲が事業活動を停止した場合（甲及びその連結子会社の事業活動が停止されたと乙が認めた場合）又はこれに準ずる状態になった場合。なお、これに準ずる状態になった場合とは、次の a から c までに掲げる場合その他甲が事業活動を停止した場合に準ずる状態になった場合と乙が認めた場合をいうものとし、当該 a から c までに掲げる場合には当該 a から c までに掲げる日に同号に該当するものとして取り扱う。

- a 甲が、合併により解散する場合のうち、合併に際して甲の株主に対してその株券等に代わる財産の全部又は一部として次の（a）又は（b）に該当する株券等を交付する場合は、原則として、合併がその効力を生ずる日の3日前（休業日を除外する。）の日
 - （a） TOKYO PRO Marketの上場株券等
 - （b） 特例第132条の規定の適用を受け、速やかにTOKYO PRO Marketに上場される見込みのある株券等
- b 甲が、前 a に規定する合併以外の合併により解散する場合は、甲から当該合併に関する株主総会（普通

出資者総会を含む。)の決議についての書面による報告を受けた日(当該合併について株主総会の決議による承認を要しない場合には、取締役会の決議(委員会設置会社にあつては、執行役の決定を含む。)についての書面による報告を受けた日)

- c 甲が、a及び前bに規定する事由以外の事由により解散する場合(本条第3号bの規定の適用を受ける場合を除く。)は、甲から当該解散の原因となる事由が発生した旨の書面による報告を受けた日

⑥ 不適当な合併等

甲が非上場会社の吸収合併又はこれに類するもの(i 非上場会社を完全子会社とする株式交換、iの2 非上場会社を子会社とする株式交付、ii 会社分割による非上場会社からの事業の承継、iii 非上場会社からの事業の譲受け、iv 会社分割による他の者への事業の承継、v 他の者への事業の譲渡、vi 非上場会社との業務上の提携、vii 第三者割当による株式若しくは優先出資の割当て、viii その他非上場会社の吸収合併又はiからviiまでと同等の効果をもたらすと認められる行為)で定める行為(以下本号において「吸収合併等」という。)を行った場合に、甲が実質的な存続会社でないと乙が認めた場合

⑦ 支配株主との取引の健全性の毀損

第三者割当により甲の支配株主(甲の親会社又は甲の議決権の過半数を直接若しくは間接に保有する者)が異動した場合(当該割当により交付された募集株式等の転換又は行使により支配株主が異動する見込みがある場合を含む)において、支配株主との取引に関する健全性が著しく毀損されていると乙が認めるとき

⑧ 発行情報等の提出遅延

甲が提出の義務を有する特定証券情報、発行情報又は有価証券報告書等につき、特例及び法令に定める期間内に提出しなかった場合で、乙がその遅延理由が適切でないと判断した場合

⑨ 虚偽記載又は不適正意見等

次のa又はbに該当する場合

- a 甲が開示書類等に虚偽記載を行い、かつ、その影響が重大であると乙が認める場合

- b 甲の財務諸表等に添付される監査報告書等において、公認会計士等によって、監査報告書については「不適正意見」又は「意見の表明をしない」旨(天災地変等、上場会社の責めに帰すべからざる事由によるものである場合を除く。)が記載され、かつ、その影響が重大であると乙が認める場合

⑩ 法令違反及び上場契約違反等

甲が重大な法令違反又は特例に関する重大な違反を行った場合

⑪ 株式事務代行機関への委託

甲が株式事務を特例で定める株式事務代行機関に委託しないこととなった場合又は委託しないこととなることが確実となった場合

⑫ 株式の譲渡制限

甲がTOKYO PRO Marketに上場する株式の譲渡につき制限を行うこととした場合

⑬ 完全子会社化

甲が株式交換又は株式移転により他の会社の完全子会社となる場合

⑭ 指定振替機関における取扱い

甲が発行する株券が指定振替機関の振替業における取扱いの対象とならないこととなった場合

⑮ 株主の権利の不当な制限

甲が次の a から g までのいずれかに掲げる行為を行っている場合において、株主の権利内容及びその行使が不当に制限されていると乙が認めた場合その他株主の権利内容及びその行使が不当に制限されていると乙が認めた場合をいう。

- a 買収者以外の株主であることを行使又は割当ての条件とする新株予約権を株主割当て等の形で発行する買収防衛策（以下「ライツプラン」という。）のうち、行使価額が株式の時価より著しく低い新株予約権を導入時点の株主等に対し割り当ておくものの導入（実質的に買収防衛策の発動の時点の株主に割り当てるために、導入時点において暫定的に特定の者に割り当ておく場合を除く。）
- b ライツプランのうち、株主総会で取締役の過半数の交代が決議された場合においても、なお廃止又は不発動とすることができないものの導入
- c 拒否権付種類株式のうち、取締役の過半数の選解任その他の重要な事項について種類株主総会の決議を要する旨の定めがなされたものの発行に係る決議又は決定（持株会社である甲の主要な事業を行っている子会社が拒否権付種類株式又は取締役選任権付種類株式を甲以外の者を割当先として発行する場合において、当該種類株式の発行が甲に対する買収の実現を困難にする方策であると乙が認めるときは、甲が重要な事項について種類株主総会の決議を要する旨の定めがなされた拒否権付種類株式を発行するものとして取り扱う。）。
- d TOKYO PRO Marketに上場している株券について、株主総会において議決権を行使することができる事項のうち取締役の過半数の選解任その他の重要な事項について制限のある種類の株式への変更に係る決議又は決定。
- e TOKYO PRO Marketに上場している株券より議決権の多い株式（取締役の選解任その他の重要な事項について株主総会において一個の議決権を行使することができる数の株式に係る剰余金の配当請求権その他の経済的利益を受ける権利の価額等がTOKYO PRO Marketに上場している株券より低い株式をいう。）の発行に係る決議又は決定。
- f 議決権の比率が300%を超える第三者割当に係る決議又は決定。
- g 株主総会における議決権を失う株主が生じることとなる株式併合その他同等の効果をもたらす行為に係る決議又は決定。

⑩ 全部取得

甲がTOKYO PRO Marketに上場している株券に係る株式の全部を取得する場合。

⑪ 反社会的勢力の関与

甲が反社会的勢力の関与を受けている事実が判明した場合において、その実態がTOKYO PRO Marketの市場に対する株主及び投資者の信頼を著しく毀損したと乙が認めるとき。

⑫ その他

前各号のほか、公益又は投資者保護のため、乙若しくは東証が上場廃止を適当と認めた場合。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

該当事項はありません。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、本書公表日現在において当社が判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社の財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この財務諸表の作成にあたって、経営者による会計方針の選択・適用、資産・負債及び収益・費用の報告金額及び開示に影響を与える見積りを必要としております。経営者は、これらの見積りについて、過去の実績等を勘案し合理的に判断しておりますが、実際の結果は、見積りによる不確実性のため、これらの見積りと異なる場合があります。

(2) 財政状態の分析

第13期事業年度（自 2021年2月1日 至 2022年1月31日）

(資産の部)

総資産は1,568,502千円（前期末比227,414千円増加）となりました。流動資産につきましては、1,275,213千円（同271,074千円増加）となりました。これは主に、アパート・ワンルーム物件の販売強化による販売用不動産の増加331,156千円等によるものです。固定資産につきましては、本社事務所拡張工事による増加があった一方で、自社保有物件の販売用不動産への振替等により、前事業年度に比べ43,659千円減少し、293,289千円となりました。

(負債の部)

総負債は1,350,445千円（前期末比260,175千円増加）となりました。流動負債につきましては、872,093千円（同280,734千円増加）となりました。これは主に、販売用不動産の増加に伴う短期借入金の増加331,750千円及び買掛金の減少64,520千円等によるものです。固定負債につきましては、478,351千円（同20,559千円減少）となりました。これは主に、長期借入金の減少22,455千円等によるものです。

(純資産の部)

純資産につきましては218,057千円（前期末比32,760千円減少）となりました。これは、主に当期純損失32,678千円によるものです。

第14期中間会計期間（自 2022年2月1日 至 2022年7月31日）

(資産の部)

総資産は1,934,003千円（前期末比365,501千円増）となりました。流動資産につきましては、1,564,058千円（同288,845千円増）となりました。これは主に、現金及び預金の増加212,667千円及びアパート物件の在庫拡充による仕掛販売用不動産の増加103,382千円等によるものです。固定資産につきましては、369,944千円（同76,655千円増）となりました。これは主に、販売用不動産から固定資産への振替等による有形固定資産の増加57,476千円等によるものです。

(負債の部)

総負債は1,704,753千円（前期末比354,308千円増）となりました。流動負債につきましては、1,088,874千円（同216,780千円増）となりました。これは主に、仕掛販売用不動産の増加等による短期借入金の増加109,400千円等によるものです。固定負債につきましては、615,879千円（同137,528千円増）となりました。これは主に、運転資金確保による社債の増加100,000千円及び長期借入金の増加37,639千円等によるものです。

(純資産の部)

純資産につきましては229,249千円（前期末比11,192千円増）となりました。これは、主に中間純利益11,095千円によるものです。

(3) 経営成績の分析

「1【業績等の概要】(1)業績」に記載のとおりであります。

(4) 経営成績に重要な影響を与える要因

「4【事業等のリスク】」に記載のとおりであります。

(5) キャッシュ・フローの状況の分析

「1【業績等の概要】(2)キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

(6) 運転資本金調達予定日(2023年4月26日)から12ヶ月間の当社の運転資本は、自己資本及び借入による資金調達が可能であり、十分であると認識しております。

第4 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

第13期事業年度（自 2021年2月1日 至 2022年1月31日）

当事業年度において、当社は43,140千円の設備投資を行っております。その主な内訳は、建設仮勘定の増加が22,498千円であります。なお、重要な設備の除却・売却等は該当ありません。

なお、不動産買取再販・収益不動産販売・賃貸仲介を主体とする不動産事業を行っており、単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

第14期中間会計期間（自 2021年2月1日 至 2022年7月31日）

当中間会計期間において、重要な設備の除却・売却等は該当ありません。

なお、当社は不動産販売を主体とする不動産事業を行っており、単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

2 【主要な設備の状況】

第13期事業年度における主要な設備は、次のとおりであります。

2022年1月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (名)	
		建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	器具 及び備品	土地 (面積㎡)	その他		合計
名古屋地区 物件 (5棟)	賃貸用不動産	100,172	-	0	44,538 (401)	-	144,711	-

(注) 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

第14期中間会計期間末における主要な設備は、次のとおりであります。

2022年7月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (名)	
		建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	器具 及び備品	土地 (面積㎡)	その他		合計
名古屋地区 物件 (6棟)	賃貸用不動産	112,828	-	0	78,176 (845)	-	191,005	-

(注) 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

3 【設備の新設、除却等の計画】 (2023年1月31日現在)

該当事項はありません。

第5 【発行者の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

記名・無記名の別、額面・無額面の別及び種類	発行可能株式総数(株)	未発行株式数(株)	事業年度末現在発行数(2022年1月31日)(株)	公表日現在発行数(2023年3月23日)(株)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	160,000	-	20	40,000	-	単元株式数100株
計	160,000	-	20	40,000	-	-

(注) 2023年1月31日開催の取締役会決議により、同日付で普通株式1株につき2,000株の割合で株式分割を行っております。これにより発行済株式総数は39,980株増加し、40,000株となっております。

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【MSCB等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数(株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額(千円)	資本金残高(千円)	資本準備金増減額(千円)	資本準備金残高(千円)
2009年2月5日(注1)	-	20	-	1,000	-	-
2023年1月31日(注2)	39,980	40,000	-	1,000	-	-

(注1) 会社設立時の株式発行となります。

(注2) 株式分割(1:2,000)によるものであります。

(6) 【所有者別状況】

2023年1月31日現在

区分	株式の状況								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	-	-	-	-	-	1	1	-
所有株式数(単元)	-	-	-	-	-	-	400	400	-
所有株式数の割合(%)	-	-	-	-	-	-	100	100	-

(7) 【大株主の状況】

「第三部【株式公開情報】 第3【株主の状況】」に記載のとおりです。

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2023年1月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	-	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 40,000	400	完全議決権株式であり、株主としての権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であります。なお、単元株式数は100株となっております。
単元未満株式	-	-	-
発行済株式総数	40,000	-	-
総株主の議決権	-	400	-

② 【自己株式等】

該当事項はありません。

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

該当事項はありません。

3 【配当政策】

当社では株主に対する利益還元を経営上の重要政策として認識し、業績の状況、取り巻く環境及び中長期を展望した財務体質を勘案し、継続的かつ安定的に実施することを基本方針としております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めております。これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。なお、当事業年度の配当につきましては、内部留保資金の確保のため実施しておりません。内部留保資金につきましては、企業体質の強化、将来の事業展開のための資金等に充当してまいります。

今後の配当につきましては、財政状態、経営成績及び今後の事業計画を勘案し内部留保とのバランスを図りながらその実施を検討する所存であります。

4 【株価の推移】

当社株式は、非上場であるため、該当事項はありません。

5 【役員 の 状 況】

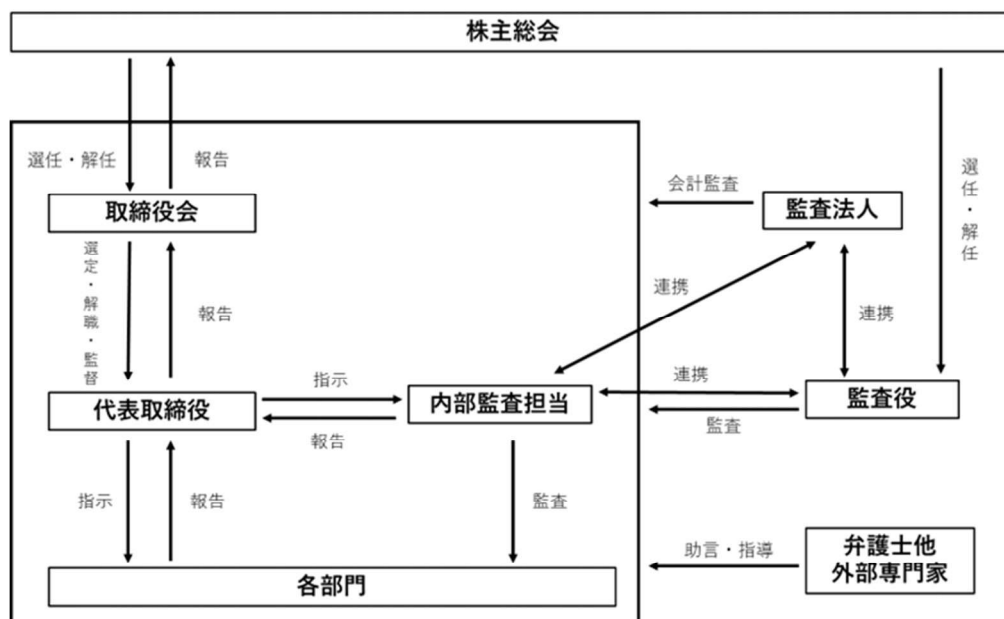
男性 4名 女性 1名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	報酬	所有株式数(株)
代表取締役	社長	中山 耕一	1977年11月21日	2000年4月 2001年4月 2004年4月 2008年4月 2009年2月 2014年9月 2021年1月	石原住宅株式会社 入社 近鉄不動産株式会社 入社 有限会社池田商店 入社 アイエス不動産株式会社 入社 当社設立 代表取締役就任 (現任) グローバルテック株式会社 設立 代表取締役就任 グローバルテック株式会社 解散	(注1)	(注3)	40,000
取締役	管理本部長	加藤 勝	1972年3月17日	1996年4月 2020年4月 2021年6月	東海ゴム工業株式会社(現 住友理工株式会社) 入社 株式会社シンコー 入社 当社入社 取締役就任 (現任)	(注1)	(注3)	-
取締役	事業本部長	高松 孝次	1980年4月10日	2003年4月 2008年10月 2010年4月 2010年12月 2015年9月 2022年1月	株式会社ナカタケ 入社 クオリティディベロップメント株式会社 入社 株式会社プラスアクト 入社 株式会社C-ACTION 設立 当社入社 取締役就任 (現任)	(注1)	(注3)	-
監査役		稲葉 有俊	1979年2月23日	2006年12月 2013年7月 2014年9月 2016年4月 2021年4月	あらた監査法人(現 PwCあらた有限責任監査法人) 入所 株式会社シグナル 入社 (取締役現任) 公認会計士 稲葉有俊会計事務所 設立 税理士法人ブレインワン 入社 (代表社員 現任) 当社監査役就任 (現任)	(注2) (注4)	(注3)	-
計								40,000

- (注) 1. 取締役の任期は、2023年1月31日開催の臨時株主総会終結の時から選任後1年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時株主総会終結の時までであります。
2. 監査役の任期は、2023年1月31日開催の臨時株主総会終結の時から選任後4年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時株主総会終結の時までであります。
3. 2022年1月期における役員報酬の総額は54,597千円を支給しております。
4. 稲葉有俊氏は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】



① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、経営環境が急速に変化する中で企業が安定的に成長・発展するためには、経営の効率性、健全性、透明性を高めていくことが必要不可欠と考えております。そのため、コーポレート・ガバナンスを拡充・徹底することが最重要課題と認識しております。また、今後も社会環境の変化や法令等の施行に応じて、コーポレート・ガバナンスの実効性を高めるために必要な見直しを行い、ステークホルダーの皆様に対し公正な経営情報の開示の適正性を確保してまいります。

② 会社の機関の内容およびコーポレート・ガバナンス体制について

1) 取締役会

当社の取締役会は、3名の取締役で構成されております。

取締役会は、法令、定款及び株主総会決議に基づき、職務権限規程、取締役会規程その他の当社諸規程等の会社運営の基礎となる諸基準を整備し、取締役の職務執行の適正性及び効率性を確保しております。なお、定例取締役会が毎月1回、その他必要に応じて臨時取締役会が開催され、経営に関する重要事項を決定しております。

取締役は、会社の業務執行状況を取締役会に報告するものとしており、これをもとに、取締役会は取締役の職務執行を監督しております。

2) 監査役

当社は監査役制度を採用しており、1名で構成されております。

監査役は、監査役規程に基づき、取締役の業務執行状況を適正に監査しております。また、監査役取締役会に出席し、取締役の職務の執行状況を監視するとともに、適宜必要な意見を述べております。

3) 内部監査

当社の内部監査は、管理部門が主管部署として、業務を監査しております。また、管理部門の監査は、

代表取締役社長が指名する者が実施しており、相互に牽制する体制をとっております。各部の監査結果並びに改善点につきましては、内部監査担当者より、代表取締役社長に対して改善提言を含む内部監査報告書を提出する体制をとっております。

なお、内部監査担当者、監査役及び監査法人は、適宜意見交換・連携を行うことで、効率的な監査を行える体制になっております。

4) 会計監査

当社は、かがやき監査法人と監査契約を締結し、独立した立場から「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第110条第5項の規定に基づき監査を受けております。なお2022年1月期において監査を執行した公認会計士は林幹根氏、武井正彦氏の2名であり、いずれも継続監査年数は7年以内であります。また、当該監査業務にかかる補助者は公認会計士6名その他2名であります。

なお、当社と監査に従事する公認会計士及びその補助者との間には特別の利害関係はありません。

③ 内部統制システムの整備の状況について

当社は、職務権限規程の遵守により、業務を合理的に分担することで、特定の組織並びに特定の担当者に業務や権限が集中することを回避し、内部牽制機能が適切に働くよう努めております。

④ 社外取締役および社外監査役との関係について

当社は社外監査役1名を選任しております。社外監査役は、経営に対する監視、監督機能を担っております。社外監査役稲葉有俊氏は、当社との間には人的関係、資金的関係、又は、取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外取締役の重要性については認識しておりますが、当社の経営規模・体制を総合的に勘案すると、ガバナンスは適正に構築、運用されていることを踏まえ、社外取締役を設置しておりません。当社といたしましては、今後、経営における社外取締役の役割について、十分な議論と検証を重ね、設置の必要性があると判断する場合には、具体的な検討を行ってまいりたいと存じます。

また、当社は、社外取締役、又は社外監査役の独立性に関する基準又は、方針について特段の定めはありませんが、選任に際しては、客観的、中立の経営監視機能が十分に発揮されるよう、取引関係等を考慮した上で、選任を行っております。

⑤ 役員報酬の内容

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)			対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	賞与	ストック オプション	
取締役(社外取締役を除く)	53,597	53,597	-	-	6
監査役(社外監査役を除く)	-	-	-	-	-
社外役員	1,000	1,000	-	-	1

(注) 上記には、当事業年度中に退任した取締役及び辞任した取締役に対する報酬等の額及びその員数を含めてお

ります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

最近事業年度	
監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬(千円)
7,500	-

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査法人の発行者に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の事業規模等を勘案して監査報酬額を決定しております。

第6 【経理の状況】

1. 財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の財務諸表は、「財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。
- (2) 財務諸表については、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第110条第6項で認められた会計基準のうち、我が国において一般的に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して作成しております。

2. 中間財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の中間財務諸表は、「中間財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和52年大蔵省令第38号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の中間財務諸表は、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第110条第6項で認められた会計基準のうち、我が国において一般的に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して作成しております。

3. 監査証明について

- (1) 当社は、特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第5項の規定に基づき、当社の前事業年度（2021年2月1日から2022年1月31日まで）の財務諸表について、かがやき監査法人の監査を受けております。
- (2) 当社は、特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第5項の規定に基づき、当社の当中間会計期間（2022年2月1日から2022年7月31日まで）の財務諸表について、かがやき監査法人の監査を受けております。

4. 連結財務諸表及び中間連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので連結財務諸表及び中間連結財務諸表を作成しておりません。

【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	221,055	172,309
売掛金	7,209	5,743
販売用不動産	※2、※3 556,664	※2、※3 887,821
仕掛販売用不動産	※3 181,972	※3 143,185
前渡金	28,024	19,849
前払費用	7,020	21,992
未収還付法人税	-	9,155
未収還付消費税	-	9,588
その他	2,189	5,681
貸倒引当金	-	△ 113
流動資産合計	1,004,138	1,275,213
固定資産		
有形固定資産		
建物	※1、※2、※3 145,079	※1、※2、※3 119,708
構築物	※1 475	-
車両運搬具	※1 5,623	※1 4,903
工具、器具及び備品	※1 136	※1 5,385
土地	※2、※3 63,091	※2、※3 44,538
リース資産	-	※1 2,025
建設仮勘定	-	22,498
有形固定資産合計	214,405	199,060
無形固定資産		
ソフトウェア	1,253	1,482
無形固定資産合計	1,253	1,482
投資その他の資産		
投資有価証券	2,695	3,763
出資金	3,910	3,940
長期貸付金	19,270	17,954
長期前払費用	6,572	6,253
保険積立金	29,039	34,984
長期預金	48,400	10,000
繰延税金資産	5,779	10,618
その他	5,623	5,231
投資その他の資産合計	121,291	92,746
固定資産合計	336,949	293,289
資産合計	1,341,087	1,568,502

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年1月31日)		当事業年度 (2022年1月31日)	
負債の部				
流動負債				
買掛金		69,156		4,635
短期借入金	※3	429,350	※3	761,100
1年内返済予定の長期借入金	※3	33,990	※3	52,574
未払金		864		14,767
未払費用		18,966		7,612
未払法人税等		20,854		35
リース債務		-		479
前受金		8,425		13,678
賞与引当金		2,617		4,006
完成工事補償引当金		1,636		6,763
その他		5,497		6,441
流動負債合計		591,358		872,093
固定負債				
長期借入金	※3	494,803	※3	472,348
リース債務		-		1,828
資産除去債務		330		1,000
その他		3,776		3,174
固定負債合計		498,910		478,351
負債合計		1,090,269		1,350,445
純資産の部				
株主資本				
資本金		1,000		1,000
利益剰余金				
その他利益剰余金				
繰越利益剰余金		249,624		216,946
利益剰余金合計		249,624		216,946
株主資本合計		250,624		217,946
評価・換算差額等				
その他有価証券評価差額金		193		110
評価・換算差額等合計		193		110
純資産合計		250,818		218,057
負債純資産合計		1,341,087		1,568,502

【中間貸借対照表】

(単位：千円)

当中間会計期間 (2022年7月31日)		
資産の部		
流動資産		
現金及び預金		384,976
売掛金		22,313
販売用不動産	※2、※3	873,518
仕掛販売用不動産	※3	246,568
前渡金		9,200
前払費用		18,047
未収還付法人税		-
未収還付消費税		-
その他		9,568
貸倒引当金		△ 134
流動資産合計		1,564,058
固定資産		
有形固定資産		
建物	※1、※2、※3	151,135
車両運搬具	※1	3,521
工具、器具及び備品	※1	21,896
土地	※2、※3	78,176
リース資産	※1	1,807
建設仮勘定		-
有形固定資産合計		256,537
無形固定資産		
ソフトウェア		1,665
無形固定資産合計		1,665
投資その他の資産		
投資有価証券		3,908
出資金		8,940
長期貸付金		17,774
長期前払費用		10,035
保険積立金		37,576
長期預金		19,301
繰延税金資産		6,641
その他		7,564
投資その他の資産合計		111,741
固定資産合計		369,944
資産合計		1,934,003

(単位：千円)

当中間会計期間
(2022年7月31日)

負債の部		
流動負債		
買掛金		13,197
短期借入金	※3	870,500
1年内返済予定の長期借入金	※3	64,554
未払金		47,235
未払費用		27,660
未払法人税等		4,532
リース債務		479
契約負債		19,274
賞与引当金		9,107
完成工事補償引当金		8,286
その他		24,048
流動負債合計		1,088,874
固定負債		
社債		100,000
長期借入金	※3	509,988
リース債務		1,588
資産除去債務		1,000
その他		3,302
固定負債合計		615,879
負債合計		1,704,753
純資産の部		
株主資本		
資本金		1,000
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金		228,041
利益剰余金合計		228,041
株主資本合計		229,041
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		208
評価・換算差額等合計		208
純資産合計		229,249
負債純資産合計		1,934,003

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度		当事業年度	
	(自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)		(自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)	
売上高		1,781,853		2,023,340
売上原価		1,450,272		1,636,340
売上総利益		331,581		387,000
販売費及び一般管理費	※1	309,955	※1	425,772
営業利益又は営業損失(△)		21,625		△ 38,772
営業外収益				
受取利息及び配当金		29		51
助成金収入		7,211		10,422
受取保険金		6,078		5,940
その他		1,707		3,154
営業外収益合計		15,025		19,567
営業外費用				
支払利息		23,512		23,071
その他		225		644
営業外費用合計		23,737		23,715
経常利益又は経常損失(△)		12,913		△ 42,921
特別利益				
固定資産売却益		3,338		520
リース解約益		-		5,100
特別利益合計		3,338		5,620
特別損失				
固定資産除却損		-		96
特別損失合計		-		96
税引前当期純利益又は税引前当期純損失(△)		16,251		△ 37,396
法人税、住民税及び事業税		21,498		71
法人税等調整額		△ 12,305		△ 4,789
法人税等合計額		9,192		△ 4,718
当期純利益又は当期純損失(△)		7,059		△ 32,678

【中間損益計算書】

(単位：千円)

当中間会計期間	
(自 2022年2月1日	
至 2022年7月31日)	
売上高	1,386,494
売上原価	1,101,590
売上総利益	284,904
販売費及び一般管理費	※1 278,050
営業利益	6,854
営業外収益	
受取利息及び配当金	48
助成金収入	26,035
受取保険金	560
その他	375
営業外収益合計	27,019
営業外費用	
支払利息	14,277
その他	0
営業外費用合計	14,278
経常利益	19,595
税引前中間純利益	19,595
法人税、住民税及び事業税	4,570
法人税等調整額	3,929
法人税等合計	8,499
中間純利益	11,095

③ 【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2020年2月1日 至 2021年1月31日）

（単位：千円）

	株主資本			株主 資本 合計	評価・換算差額等		純資産 合計
	資本金	利益剰余金			その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
		その他利 益剰余金	利益 剰余金 合計				
当期首残高	1,000	234,757	234,757	235,757	-	-	235,757
遡及修正による累積的影響額		7,808	7,808	7,808			7,808
遡及修正後の当期首残高	1,000	242,565	242,565	243,565			243,565
当期変動額							
当期純利益		7,059	7,059	7,059			7,059
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				-	193	193	193
当期変動額合計	-	7,059	7,059	7,059	193	193	7,252
当期末残高	1,000	249,624	249,624	250,624	193	193	250,818

当事業年度（自 2021年2月1日 至 2022年1月31日）

（単位：千円）

	株主資本			株主 資本 合計	評価・換算差額等		純資産 合計
	資本金	利益剰余金			その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
		その他利 益剰余金	利益 剰余金 合計				
当期首残高	1,000	249,624	249,624	250,624	193	193	250,818
当期変動額							
当期純損失（△）		△ 32,678	△ 32,678	△ 32,678			△ 32,678
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					△ 82	△ 82	△ 82
当期変動額合計	-	△ 32,678	△ 32,678	△ 32,678	△ 82	△ 82	△ 32,760
当期末残高	1,000	216,946	216,946	217,946	110	110	218,057

【中間株主資本等変動計算書】

当中間会計期間（自 2022年2月1日 至 2022年7月31日）

（単位：千円）

	株主資本			株主 資本 合計	評価・換算差額等		純資産 合計
	資本金	利益剰余金			その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
		その他利 益剰余金	利益 剰余金 合計				
当期首残高	1,000	216,946	216,946	217,946	110	110	218,057
当中間期変動額							
中間純利益		11,095	11,095	11,095			11,095
株主資本以外の項目の 当中間期変動額（純額）					97	97	97
当中間期変動額合計	-	11,095	11,095	11,095	97	97	11,192
当中間期末残高	1,000	228,041	228,041	229,041	208	208	229,249

④ 【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益又は税引前当期純損失(△)	16,251	△ 37,396
減価償却費	15,482	14,796
貸倒引当金の増減額(△は減少)	-	113
賞与引当金の増減額	2,617	1,388
完成工事補償引当金の増減額	1,636	5,127
受取利息及び受取配当金	△ 29	△ 51
支払利息	23,512	23,071
固定資産売却益	△ 3,338	△ 520
リース解約益	-	△ 5,100
固定資産除売却損	-	96
売上債権の増減額(△は増加)	△ 3,046	1,466
販売用不動産の増減額(△は増加)	344,134	△ 331,156
仕掛販売用不動産の増減額(△は増加)	△ 110,292	38,788
有形固定資産から販売用不動産への振替	-	82,468
販売用不動産から有形固定資産への振替	-	△ 38,699
仕入債務の増減額(△は減少)	53,505	△ 64,520
その他資産の増減額(△は増加)	△ 13,930	△ 20,943
その他負債の増減額(△は減少)	△ 35,090	15,007
小計	291,412	△ 316,065
利息及び配当金の受取額	29	51
利息の支払額	△ 23,060	△ 24,721
法人税等の還付額	34,435	-
法人税等の支払額	△ 679	△ 31,159
営業活動によるキャッシュ・フロー	302,138	△ 371,895
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入れによる支出	△ 77,400	△ 67,501
定期預金の払戻しによる収入	48,432	93,701
投資有価証券の取得による支出	△ 3,020	△ 1,230
有形固定資産の取得による支出	△ 12,926	△ 43,270
有形固定資産の売却による収入	26,300	3,540
貸付金の貸付による支出	△ 1,911	-
貸付金の回収による収入	636	2,066
保険積立金の積立による支出	△ 5,840	△ 5,945
その他	△ 407	4,060
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 26,137	△ 14,577
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	921,870	1,451,006
短期借入金の返済による支出	△ 1,294,770	△ 1,119,256
長期借入れによる収入	323,000	114,000
長期借入金の返済による支出	△ 77,620	△ 117,870
リース債務の返済による支出	-	△ 2,352
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 127,520	325,527
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	148,480	△ 60,945
現金及び現金同等物の期首残高	34,572	183,053
現金及び現金同等物の期末残高	※1 183,053	※1 122,107

【中間キャッシュ・フロー計算書】

当中間会計期間
 (自 2022年2月1日
 至 2022年7月31日)

営業活動によるキャッシュ・フロー	
税引前中間純利益	19,595
減価償却費	10,096
社債発行費償却	194
貸倒引当金の増減額(△は減少)	21
賞与引当金の増減額(△は減少)	5,101
完成工事補償引当金の増減額(△は減少)	1,523
受取利息及び受取配当金	△ 48
支払利息	14,277
売上債権の増減額(△は増加)	△ 16,569
販売用不動産の増減額(△は増加)	14,302
仕掛販売用不動産の増減額(△は増加)	△ 103,382
販売用不動産から有形固定資産への振替	△ 49,156
仕入債務の増減額(△は減少)	8,561
未収還付消費税等の増減額(△は増加)	9,588
その他資産の増減額(△は増加)	10,124
その他負債の増減額(△は減少)	71,763
小計	△ 4,008
利息及び配当金の受取額	48
利息の支払額	△ 14,275
法人税等の還付額	9,155
法人税等の支払額	△ 74
営業活動によるキャッシュ・フロー	△ 9,153
投資活動によるキャッシュ・フロー	
定期預金の預入による支出	△ 26,398
定期積金の預入による支出	△ 16,101
出資金の取得による支出	△ 5,000
有形固定資産の取得による支出	△ 14,750
貸付金の回収による収入	180
保険積立金の積立による支出	△ 2,591
その他	△ 3,788
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 68,451
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	1,025,450
短期借入金の返済による支出	△ 916,050
長期借入れによる収入	75,000
長期借入金の返済による支出	△ 25,380
社債の発行による収入	98,053
財務活動によるキャッシュ・フロー	257,072
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	179,468
現金及び現金同等物の期首残高	122,107
現金及び現金同等物の中間期末残高	※1 301,576

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

時価のあるもの 決算末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は、移動平均法により算定）

時価のないもの 移動平均法による原価法

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）により評価しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。ただし、建物、ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給対象期間に応じた支給見込額を計上しております。

(3) 完成工事補償引当金

完成工事に係る契約不適合責任等の補修費用に備えるため、当事業年度の完成工事に対する将来の見積補償額に基づいて計上しております。

4. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許資金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

5. その他財務諸表の作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

また、控除対象外消費税等は発生事業年度の費用として処理しております。

(表示方法の変更)

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」の適用

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」(企業会計基準第31号 2020年3月31日)を当事業年度の年度末に係る財務諸表から適用し、財務諸表に重要な会計上の見積りに関する注記を記載しております。

ただし、当該注記においては、当該会計基準第11項ただし書きに定める経過的な取扱いに従って、前事業年度末に係る内容については記載しておりません。

(重要な会計上の見積り)

販売用不動産及び仕掛販売用不動産の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：千円)

	当事業年度
販売用不動産	887,821
仕掛用販売用不動産	143,185

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社では、販売用不動産及び仕掛販売用不動産について、当事業年度末における帳簿価額と正味売却価額のいずれか低い方の金額で評価しており、また、正味売却価額は売価から見積追加工事原価及び見積販売直接経費を控除することにより算定しております。

販売用不動産及び仕掛販売用不動産の正味売却価額の見積りの基礎となる販売見込額は、物件ごとの現況に応じて、物件の立地、規模、周辺の売買取引事例等を踏まえて算出しております。なお、物件ごとに特性があり、周辺立地の環境の変化、景気動向、金利動向、地価動向及び住宅税制等の影響を受けて、その見積りは変動する可能性があります。

上記の主要な仮定の変動によって正味売却価額が変動することになり、棚卸資産評価損の計上が必要と判断された場合には、翌事業年度の財務諸表に影響を与える可能性があります。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2021年3月26日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることと

され、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2023年1月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「棚卸資産の評価に関する会計基準」（企業会計基準第9号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日 企業会計基準委員会）
- ・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日 企業会計基準委員会）
- ・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）が、公正価値測定についてほぼ同じ内容の詳細なガイダンス（国際財務報告基準（IFRS）においてはIFRS第13号「公正価値測定」、米国会計基準においてはAccounting Standards CodificationのTopic 820「公正価値測定」）を定めている状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、主に金融商品の時価に関するガイダンス及び開示に関して、日本基準を国際的な会計基準との整合性を図る取組みが行われ、「時価の算定に関する会計基準」等が公表されたものです。企業会計基準委員会の時価の算定に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、統一的な算定方法を用いることにより、国内外の企業間における財務諸表の比較可能性を向上させる観点から、IFRS第13号の定めを基本的にすべて取り入れることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮し、財務諸表間の比較可能性を大きく損なわせない範囲で、個別項目に対するその他の取扱いを定めることとされております。

(2) 適用予定日

2023年1月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「時価の算定に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で未定であります。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症の影響について

新型コロナウイルス感染症拡大による影響については、今後の広がり方や収束時期等を正確に予測することは困難な状況にあります。当事業年度末時点で入手可能な外部情報等を踏まえて、当社では、本感染症は長期化せず収束し、不動産販売状況等に与える影響は限定的であるとの仮定を置き、たな卸資産の評価及び繰延税金

資産の回収可能性等の会計上の見積りを行っております。

(貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の減価償却累計額

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
有形固定資産の減価償却累計額	48,133	53,854

※2 保有目的の変更

固定資産として計上されていた「建物」45,055千円、「土地」37,413千円を保有目的の変更により、当事業年度に「販売用不動産」に振り替えております。

販売用不動産として計上されていた38,699千円を保有目的の変更により、当事業年度に「建物」19,838千円、「土地」18,861千円に振り替えております。

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産及び担保に係る債務は次のとおりであります。

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
販売用不動産	369,628	632,241
仕掛販売用不動産	75,961	141,313
建物	115,372	66,938
土地	57,996	20,582
計	618,959	861,076

(単位：千円)

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
短期借入金	429,350	751,100
1年内返済予定の長期借入金	7,981	4,281
長期借入金	153,369	67,557
計	590,700	822,938

(損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費

イ 主要な費目の内訳

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
役員報酬	27,960	54,597
給料手当	90,489	123,736
減価償却費	15,483	14,797
租税公課	23,081	19,903

一般管理費に属する費用のおおよその割合は以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
販売費	41.1%	38.1%
一般管理費	58.9%	61.9%

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

株式の種類	当事業年度 期首株式数 (株)	当事業年度 増加株式数 (株)	当事業年度 減少株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
普通株式	20	-	-	20
合計	20	-	-	20

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

該当事項はありません。

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

株式の種類	当事業年度 期首株式数 (株)	当事業年度 増加株式数 (株)	当事業年度 減少株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
普通株式	20	-	-	20
合計	20	-	-	20

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

該当事項はありません。

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	(単位：千円)	
	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
現金及び預金	221,055	172,309
預入期間が3か月を超える定期預金	△38,002	△50,202
現金及び現金同等物	183,053	122,107

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引 (借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

①リース資産の内容

有形固定資産

主として、コンピューターサーバーであります。

②リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「2. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、資金運用については預金等に限定し、また、資金調達については銀行等の金融機関からの借入及び新株発行による方針であります。また、デリバティブ取引に関しては行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は顧客の信用リスクに晒されております。借入金は、主に営業取引に係る運転資金の調達を目的としております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク (取引先の契約不履行等に係るリスク) の管理

営業債権である売掛金については経常的に発生しており、担当者が、所定の手続きに従い、債権回収の状況を定期的にモニタリングし、支払遅延の早期把握や回収リスクの軽減を図っております。

特に金額等の重要性が高い取引については、取締役会において、取引実行の決定や回収状況の報告などを行います。

② 市場リスク (為替や金利等の変動リスク) の管理

該当事項はありません。

③ 資金調達に係る流動性リスク (支払期日に支払いを実行できなくなるリスク) の管理未払金等については月次単位での支払予定を把握するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用す

ることにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません。

前事業年度（2021年1月31日）

	貸借対照表 計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	221,055	221,055	-
(2) 売掛金	7,209	7,209	-
(3) 長期貸付金	19,270	18,247	△1,022
(4) 投資有価証券	2,695	2,695	-
(5) 長期預金	48,400	48,363	△36
資産計	298,630	297,571	△1,059
(1) 買掛金	69,156	69,156	-
(2) 短期借入金	429,350	429,350	-
(3) 未払金	864	864	-
(4) 未払法人税等	20,854	20,854	-
(5) 長期借入金（1年内返済予定を含む）	528,794	527,492	△1,301
負債計	1,049,019	1,047,717	△1,301

当事業年度（2022年1月31日）

	貸借対照表 計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	172,309	172,309	-
(2) 売掛金	5,743	5,743	-
貸倒引当金（※）	△113	△113	-
	5,630	5,630	-
(3) 長期貸付金	17,954	18,004	50
(4) 投資有価証券	3,763	3,763	-
(5) 長期預金	10,000	9,978	△21
資産計	209,657	209,686	28
(1) 買掛金	4,635	4,635	-
(2) 短期借入金	761,100	761,100	-
(3) 未払金	14,767	14,767	-
(4) 未払法人税等	35	35	-
(5) 長期借入金（1年内返済予定を含む）	524,923	522,239	△2,683
負債計	1,305,461	1,302,778	△2,683

(※) 売掛金については対応する貸倒引当金を控除しております。

金融商品の時価の算定方法に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期貸付金、(5) 長期預金

長期貸付金、長期預金の時価については、一定の期間ごとに分類し、その将来キャッシュ・フローを同様の新規貸付、預入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

(4) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

負債

(1) 買掛金、(2) 短期借入金、(3) 未払金、(4) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(5) 長期借入金

長期借入金の時価については、主に、元利金の合計額を同様の新規借入れを行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

3. 金銭債権の決算日後の償還予定額

前事業年度 (2021年1月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	221,055	-	-	-
売掛金	7,209	-	-	-
長期貸付金	1,316	2,640	5,440	9,874
長期預金	-	48,400	-	-
合計	229,581	51,040	5,440	9,874

当事業年度 (2022年1月31日)

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)	5年超10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	172,309	-	-	-
売掛金	5,743	-	-	-
長期貸付金	360	3,240	5,440	8,914
長期預金	-	10,000	-	-
合計	178,412	13,240	5,440	8,914

3. 短期借入金、1年以内返済借入金及び長期借入金の決算日後の返済予定額

前事業年度（2021年1月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	429,350	-	-	-	-	-
長期借入金	33,990	44,858	50,187	68,133	41,748	289,876

当事業年度（2022年1月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	761,100	-	-	-	-	-
長期借入金	52,574	57,903	81,827	58,080	58,080	216,457

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前事業年度（2021年1月31日）

	種類	貸借対照表計上額 (千円)	取得価額 (千円)	差額 (千円)
貸借対照表計上額が取得原価 を超えるもの	(1) 株式	2,695	2,400	295
	小計	2,695	2,400	295
貸借対照表計上額が取得原価 を超えないもの	(1) 株式	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		2,695	2,400	295

当事業年度（2022年1月31日）

	種類	貸借対照表計上額 (千円)	取得価額 (千円)	差額 (千円)
貸借対照表計上額が取得原価 を超えるもの	(1) 株式	3,763	3,600	163
	小計	3,763	3,600	163
貸借対照表計上額が取得原価 を超えないもの	(1) 株式	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		3,763	3,600	163

2. 事業年度中に売却したその他有価証券

該当事項はありません。

3. 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
繰延税金資産		
賞与引当金	901 千円	1,300 千円
繰越欠損金	-	8,155
未払事業税	2,224	-
たな卸資産	1,605	-
固定資産税	542	-
完成工事補償引当金	563	2,195
資産除去債務	113	324
その他	133	203
繰延税金資産小計	6,085	12,179
評価性引当額	113	324
繰延税金資産合計	5,971	11,854
繰延税金負債		
未収事業税	-	△926
その他有価証券評価差額金	△101	△53
資産除去債務に対応する除去費用	△89	△257
繰延税金負債合計	△191	△1,236
繰延税金資産の純額	5,779	10,618

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当事業年度(2022年1月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金 (※)	-	-	-	-	-	8,155	8,155
評価性引当額	-	-	-	-	-	-	-
繰越税金資産	-	-	-	-	-	8,155	8,155

(※) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
法定実効税率 (調整)	32.47%	
住民税均等割	0.44%	税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。
税額控除	△19.35%	
交際費の損金不算入額	25.30%	
仲介手数料の損金不算入額	24.24%	
受取配当金の益金不算入額	△0.01%	
評価性引当額の増減	0.70%	
その他	△7.22%	
税効果会計適用後の法人税率の負担率	56.56%	

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

当社では、愛知県を中心に、賃貸用の建物・土地を有しております。前事業年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は11,193千円（賃貸収益は売上に、主な賃貸費用は売上原価、販売費及び一般管理費に計上）であります。当事業年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は26,900千円（賃貸収益は売上に、主な賃貸費用は売上原価、販売費及び一般管理費に計上）であります。

また、当該賃貸等不動産の貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次の通りです。

	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
貸借対照表計上額		
期首残高	200,548	194,189
期中増減額	△6,359	△49,478
期末残高	194,189	144,711
期末時価	137,145	107,783

(注) 1. 貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。

2. 期中増減額のうち、前事業年度の主な減少額は減価償却(6,359千円)であります。当事業年度の主な増加額は用途変更に伴う販売用不動産から賃貸用不動産への振替(38,699千円)減少額は用途変更に伴う賃貸等不動産から販売用不動産への振替(82,468千円)であります。

3. 期末の時価は、主要な物件については第三者からの取得時点から、一定の評価額や適切に市場価額を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じておらず、時価の変動が軽微であると考えられるため、貸借対照表計上額に指標を用いて調整した金額をもって時価としております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、不動産買取再販・収益不動産販売・賃貸仲介を主体とする不動産事業を行っており、単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前事業年度(自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

損益計算書の売上高に占める不動産事業の割合が90%を超えているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外への外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

損益計算書の売上高の10%を占める相手先がないため、該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

損益計算書の売上高に占める不動産事業の割合が90%を超えているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外への外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

損益計算書の売上高の10%を占める相手先がないため、該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

前事業年度(自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)

種類	会社等の名称または氏名	所在地	資本金又は出資金(千円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(千円)	科目	期末残高(千円)
役員及び個人主要株主等	中山耕一	-	-	当社代表取締役社長	(被所有) 100%	不動産賃貸	社宅の賃貸(注1)	252	前受金	21
						債務被保証	当社銀行借入に対する債務被保証(注2)	848,544	-	-
役員及び個人主要株主等	中山明美	-	-	当社取締役	-	不動産賃貸	社宅の賃貸(注1)	204	前受金	17
役員及びその近親者が議決権の過半数を所有している会社	グローバルテック(株)	愛知県名古屋市	1,000	不動産業	-	-	事務所の賃貸	1,650	売掛金	4,163
							-	-	預り保証金	200
							-	-	前受金	165

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

1. 社宅の賃貸及び事務所の賃貸の取引条件は市場実勢を勘案し、協議の上決定しております。
2. 当社の借入債務に対し、当社代表取締役社長中山耕一が債務保証を行っております。なお、当該債務保証に対し、保証料の支払いは行っておりません。
3. 記載金額のうち、取引金額には消費税等が含まれておりませんが、期末残高は消費税等を含めて表示しております。

当事業年度(自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)

種類	氏名	所在地	資本金又は出資金(千円)	職業	議決権等の所有(被所有)割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(千円)	科目	期末残高(千円)
役員及び個人主要株主等	中山耕一	-	-	当社代表取締役社長	(被所有) 100%	不動産賃貸	社宅の賃貸(注1)	1,924	前受金	320
						債務被保証	当社銀行借入に対する債務被保証(注2)	1,140,227	-	-

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

1. 社宅の賃貸の取引条件は市場実勢を勘案し、協議の上決定しております。従来より当社が所有している建物を社宅として賃貸しておりましたが、2023年1月に当該物件を当社代表取締役中山耕一が買い取るにより当該取引は解消しております。
2. 当社の借入債務に対し、当社代表取締役中山耕一が債務保証を行っております。なお、当該債務保証に対し、保証料の支払いは行っておりません。また、本書提出日現在において当該債務保証は解消しております。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
1株当たり純資産額	6,270円45銭	5,451円43銭
1株当たり当期純利益 又は1株当たり当期純損失(△)	176円47銭	△816円95銭

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 2023年1月31日開催の取締役会決議に基づき、同日付で普通株式1株につき2,000株の株式分割を行いました。前事業年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失を算定しております。

3. 1株当たり当期純利益及び1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年2月1日 至 2021年1月31日)	当事業年度 (自 2021年2月1日 至 2022年1月31日)
1株当たり当期純利益		
当期純利益 又は当期純損失(△) (千円)	7,059	△ 32,678
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る当期純利益 又は当期純損失(△) (千円)	7,059	△ 32,678
普通株式の期中平均株式数(株)	20	20

1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (2021年1月31日)	当事業年度 (2022年1月31日)
純資産の部の合計額(千円)	250,818	218,057
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	-	-
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	250,818	218,057
普通株式の期末株式数(株)	20	20

(重要な後発事象)

(重要な資産の譲渡)

当社は2022年12月24日に不動産売買契約を締結し、2023年1月30日に譲渡いたしました。

1. 譲渡の理由

株式会社東京証券取引所への上場準備の一環として、自社で保有すべき土地・建物の最適化を目的として、以下の資産を譲渡することといたしました。

2. 譲渡資産の内容

資産の名称および所在地	譲渡価額	譲渡益	譲渡前の用途
アイビル (愛知県名古屋市中区千代田) 土地面積: 207.14 m ² 延床面積: 1010.62 m ²	130,000 千円	58,393 千円	賃貸不動産

- (注) 1. 譲渡価額については、不動産鑑定士の鑑定評価を参考にした適正な価格での売却となっております。
2. 譲渡益は、譲渡価額から帳簿価額および譲渡に係る諸費用を控除した金額であります。

3. 譲渡先の概要

譲渡先は当社代表取締役社長中山耕一であり、関連当事者に該当します。

4. 譲渡の日程

決議日	2022年12月20日
売買契約締結日	2022年12月24日
所有権移転日	2023年1月30日

5. 業績に与える影響について

当該固定資産の譲渡に伴う売却益は、2023年1月期事業年度において、固定資産売却益として特別利益に計上する見込みであります。

(株式分割および単元株制度の採用)

当社は2023年1月31日開催の取締役会決議に基づき、2023年1月31日付をもって株式分割を行っております。また、上記株式分割に伴い、定款の一部を変更し単元株制度を採用しております。

1. 株式分割、単元株制度の採用の目的

当社株式の流動性の向上と投資家層の拡大を図ることを目的として株式分割を実施するとともに、1単元を100株とする単元株制度を採用いたします。

2. 株式分割の概要

(1) 分割方法

2023年1月31日最終の株主名簿に記載又は記録された株主の所有株式数を、普通株式1株につき2,000株の割合をもって分割しております。

(2) 分割により増加する株式数

株式分割前の発行済株式総数	20株
今回の分割により増加する株式数	39,980株
株式分割後の発行済株式総数	40,000株
株式分割後の発行可能株式総数	160,000株

(3) 株式分割の効力発生日

2023年1月31日

(4) 1株当たり情報に与える影響

「1株当たり情報」は、当該株式分割が前事業年度の期首に行われたと仮定して算出しており、これによる影響は当該箇所反映されております。

3. 単元株制度の採用

単元株制度を採用し、普通株式の単元株式数を100株といたしました。

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)を採用しております。

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)により評価しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。ただし、建物、並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	10～29年
車両運搬具	2～4年
工具、器具及び備品	4～10年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給対象期間に応じた支給見込額を計上しております。

(3) 完成工事補償引当金

完成工事に係る契約不適合責任等の補修費用に備えるため、当事業年度の完成工事に対する将来の見積補償額に基づいて計上しております。

4. 重要な収益及び費用の計上基準

当社は、顧客との契約について、以下の5ステップアプローチに基づき、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、顧客との契約において約束された対価から値引き及び割戻し等の変動対価を控除した金額で収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

取引の対価は履行義務を充足してから主として1年以内に受領しており、重大な金融要素は含んでおりません。

① 不動産買取再販

当社は不動産買取再販を行っており、顧客に不動産を引き渡した時点で収益を認識しております。

② 収益不動産販売

当社は収益不動産販売を行っており、顧客に不動産を引き渡した時点で収益を認識しております。

③ 賃貸仲介

当社は賃貸仲介を行っており、役務が完了した時点で収益を認識しております。

④ 不動産収益

当社は当社保有のビルや区分マンションの入居者から賃料を得ており、不動産収益については、リース会計に関する会計基準に従い、不動産賃貸借契約期間の経過に応じて「その他の源泉から生じる収益」として収益を認識しております。

5. 中間キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許資金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

6. その他中間財務諸表の作成のための重要な事項

控除対象外消費税等の会計処理

資産に係る消費税等の会計処理は、発生事業年度の費用として処理しております。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当中間会計期間の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過措置に従っておりますが、利益剰余金の当期首残高に与える影響はありません。また、当中間会計期間の損益に与える影響もありません。

収益認識会計基準等を適用したため、前事業年度の貸借対照表において、「流動負債」に表示していた「前受金」は、当中間会計期間より「契約負債」として表示することとしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める

経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

この結果、収益認識会計基準等の適用を行う前と比べて、当中間貸借対照表は、「契約負債」は19,274千円増加し、「前受金」は同額減少しております。

また、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、「収益認識関係」注記のうち当中間会計期間に係る比較情報については記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当中間会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、中間財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。ただし、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」(2020年3月6日内閣府令第9号)附則第6条第2項により、経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前会計年度に係るものについては記載しておりません。

(追加情報)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響に関する会計上の見積り

新型コロナウイルス感染症の拡大による影響は現在も継続しており、今後の拡大・収束状況は依然として不透明な上、経済に与える影響は国内外の拠点によっても程度が異なり、先行きの見通しが難しい状況にあります。当社は、翌事業年度においても一定期間は事業活動への影響が継続するものの、翌会計年度末に向けて緩やかに収束するとの仮定のもと、固定資産の減損や繰延税金資産の回収可能性等の会計上の見積りを行っております。

その結果、これらの会計上の見積りに重要な影響を与えるものではないと判断しております。なお、新型コロナウイルス感染症による経済活動への影響は不確実性があるため、上記の仮定に変化が生じた場合には、翌事業年度の財務状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があり、今後の動向を引き続き注視しております。

(中間貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の減価償却累計額

(単位：千円)

当中間会計期間	
(2022年7月31日)	
有形固定資産の減価償却累計額	63,691

※2 保有目的の変更

販売用不動産として計上されていた49,156千円を保有目的の変更により、当中間会計期間に「建物」15,518千円、「土地」33,637千円に振り替えております。

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産及び担保に係る債務は次のとおりであります。

(単位：千円)

当中間会計期間	
(2022年7月31日)	
販売用不動産	610,533
仕掛販売用不動産	246,472
建物	78,551
土地	20,582
計	956,140

(単位：千円)

当中間会計期間	
(2022年7月31日)	
短期借入金	836,500
1年内返済予定の長期借入金	4,291
長期借入金	65,407
計	906,198

(中間損益計算書関係)

※1 減価償却実施額

(単位：千円)

当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)	
有形固定資産	9,836
無形固定資産	246
計	10,083

(中間株主資本等変動計算書関係)

当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

株式の種類	当事業年度 期首株式数 (株)	当中間会計期間 増加株式数 (株)	当中間会計期間 減少株式数 (株)	当中間会計期間末 株式数 (株)
普通株式	20	-	-	20
合計	20	-	-	20

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

該当事項はありません。

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(中間キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の中間期末残高と中間貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

(単位：千円)

当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)	
現金及び預金	384,976
預入期間が3か月を超える定期預金	△83,400
現金及び現金同等物	301,576

(リース取引関係)

当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)

ファイナンス・リース取引 (借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

①リース資産の内容

有形固定資産

主として、コンピューターサーバーであります。

②リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「2. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の時価等に関する事項

中間貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

	中間貸借対照表 計上額(千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
投資有価証券	3,908	3,908	-
長期貸付金	17,774	17,465	△308
長期預金	19,301	19,294	△6
資産計	40,983	40,667	△315
長期借入金(1年内返済予定を含む)	574,543	572,156	△2,386
社債	100,000	100,229	229
負債計	674,543	672,386	△2,157

(注) 1. 「現金及び預金」については、現金であること、及び預金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

2. 「売掛金」、「買掛金」、「短期借入金」、「未払金」及び「未払法人税」については、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

3. 市場価格のない株式等の中間貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	当中間会計期間(千円)
出資金	8,940

2. 金融商品のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で中間貸借対照表に計上している金融商品

当中間会計期間 (2022年7月31日)

区分	時価(千円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券	3,908	-	-	3,908
資産計	3,908	-	-	3,908

(2) 時価で中間貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当中間会計期間 (2022年7月31日)

区分	時価(千円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期貸付金	-	17,465	-	17,465
長期預金	-	19,294	-	19,294
資産計	-	36,759	-	36,759
長期借入金(1年内返済予定を含む)	-	572,156	-	572,156
社債	-	100,229	-	100,229
負債計	-	672,386	-	672,386

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期貸付金、長期預金

長期貸付金及び長期預金の時価は、一定の期間ごとに分類し、その将来キャッシュ・フローと国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率を基に割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

長期借入金(1年内返済予定を含む)、社債

長期借入金(1年内返済予定を含む)及び社債のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利が反映されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。また、固定金利によるものは、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しております。これらについては、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

当中間会計期間 (2022年7月31日)

	種類	中間貸借対照表計上額 (千円)	取得価額 (千円)	差額 (千円)
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	3,908	3,600	308
	小計	3,908	3,600	308
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		3,908	3,600	308

2. 事業年度中に売却したその他有価証券

該当事項はありません。

3. 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

(賃貸等不動産関係)

当社では、愛知県を中心に、賃貸用の建物・土地を有しております。当中間会計期間における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は13,130千円（賃貸収益は売上に、主な賃貸費用は売上原価、販売費及び一般管理費に計上）であります。

また、当該賃貸等不動産の中間貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

(単位：千円)

		当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)
中間貸借対照表計上額		
	期首残高	144,711
	期中増減額	46,293
	中間期末残高	191,005
中間期末時価		207,342

(注) 1. 中間貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。

2. 期中増減額のうち、当中間会計期間の主な増加額は用途変更に伴う販売用不動産から賃貸用不動産への振替(49,156千円)減少額は減価償却(2,862千円)であります。

3. 中間期末の時価は、主要な物件については第三者からの取得時点から、一定の評価額や適切に市場価額を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じておらず、時価の変動が軽微であると考えられるため、中間貸借対照表計上額に指標を用いて調整した金額をもって時価としております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当中間会計期間(自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)

(単位：千円)

	不動産事業	その他	合計
不動産買取再販	873,080	-	873,080
収益不動産販売	434,516	-	434,516
賃貸仲介	19,282	-	19,282
求職者支援訓練事業	-	32,547	32,547
顧客との契約から生じる収益	1,326,878	32,547	1,359,425
不動産収益	27,068	-	27,068
外部顧客への売上高	1,353,947	32,547	1,386,494

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「注記事項 重要な会計方針 4 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 当期及び翌期以降の収益の金額を理解するための情報

(1) 契約負債の残高

(単位：千円)

	当中間会計期間 2022年7月31日
契約負債(期首残高)	13,678
契約負債(当中間会計期間末残高)	19,274

契約負債は、不動産売買契約に係る顧客から手付金等として受領した前受金に関するものであります。契約負債は、収益の認識に伴い取り崩されます。

当中間会計期間に認識された収益の額のうち期首現在の契約負債残高に含まれていた金額は13,678千円であります。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社においては、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引を認識していないため、実務上の便法を使用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。また、顧客との契約から生じる対価の中に取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、不動産買取再販・収益不動産販売・賃貸仲介を主体とする不動産事業を行っており、単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

当中間会計期間(自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

損益計算書の売上高に占める不動産事業の割合が90%を超えているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外への外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称	売上高	関連するセグメント名
株式会社ライフアシスト	141,866	-

(注) 当社は、単一セグメントであるため、関連するセグメント名の記載を省略しております。

(1 株当たり情報)

	当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)
1株当たり純資産額	5,731円24銭
1株当たり中間純利益	277円38銭

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり中間純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 2023年1月31日開催の取締役会決議に基づき、同日付で普通株式1株につき2,000株の株式分割を行いました。当中間会計期間の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり中間純利益を算定しております。
3. 1株当たり中間純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当中間会計期間 (自 2022年2月1日 至 2022年7月31日)
1株当たり中間純利益	
中間純利益(千円)	11,095
普通株主に帰属しない金額(千円)	-
普通株式に係る中間純利益(千円)	11,095
普通株式の期中平均株式数(株)	20

1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	当中間会計期間 (2022年7月31日)
純資産の部の合計額(千円)	229,249
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	-
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	229,249
普通株式の期末株式数(株)	20

(重要な後発事象)

(重要な資産の譲渡)

当社は2022年12月24日に不動産売買契約を締結し、2023年1月30日に譲渡いたしました。

1. 譲渡の理由

株式会社東京証券取引所への上場準備の一環として、自社で保有すべき土地・建物の最適化を目的として、以下の資産を譲渡することといたしました。

2. 譲渡資産の内容

資産の名称および所在地	譲渡価額	譲渡益	譲渡前の用途
アイビル (愛知県名古屋市中区千代田) 土地面積: 207.14 m ² 延床面積: 1010.62 m ²	130,000 千円	58,393 千円	賃貸不動産

- (注) 1. 譲渡価額については、不動産鑑定士の鑑定評価を参考にした適正な価格での売却となっております。
2. 譲渡益は、譲渡価額から帳簿価額および譲渡に係る諸費用を控除した金額であります。

3. 譲渡先の概要

譲渡先は当社代表取締役社長中山耕一であり、関連当事者に該当します。

4. 譲渡の日程

決議日	2022年12月20日
売買契約締結日	2022年12月24日
所有権移転日	2023年1月30日

5. 業績に与える影響について

当該固定資産の譲渡に伴う売却益は、2023年1月期事業年度において、固定資産売却益として特別利益に計上する見込みであります。

(株式分割および単元株制度の採用)

当社は2023年1月31日開催の取締役会決議に基づき、2023年1月31日付をもって株式分割を行っております。

また、上記株式分割に伴い、定款の一部を変更し単元株制度を採用しております。

1. 株式分割、単元株制度の採用の目的

当社株式の流動性の向上と投資家層の拡大を図ることを目的として株式分割を実施するとともに、1単元を100株とする単元株制度を採用いたします。

2. 株式分割の概要

(1) 分割方法

2023年1月31日最終の株主名簿に記載又は記録された株主の所有株式数を、普通株式1株につき2,000株の割合をもって分割しております。

(2) 分割により増加する株式数

株式分割前の発行済株式総数 20株

今回の分割により増加する株式数 39,980株

株式分割後の発行済株式総数 40,000株

株式分割後の発行可能株式総数 160,000株

(3) 株式分割の効力発生日

2023年1月31日

(4) 1株当たり情報に与える影響

「1株当たり情報」は、当該株式分割が前事業年度の期首に行われたと仮定して算出しており、これによる影響は当該箇所に反映されております。

3. 単元株制度の採用

単元株制度を採用し、普通株式の単元株式数を100株といたしました。

② 【附属明細表】

【有価証券明細表】

有価証券の金額が資産の総額の100分の1以下であるため、財務諸表規則第124条の規定により記載を省略しております。

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は 償却累計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高(千円)
有形固定資産							
建物	182,114	27,269	51,218	158,165	38,456	7,754	119,708
構築物	527	-	527	-	-	-	-
車両運搬具	15,627	7,057	5,100	17,585	12,682	4,662	4,903
工具、器具及び備品	1,245	6,528	-	7,774	2,388	1,278	5,385
リース資産(有形)	-	2,352	-	2,352	326	326	2,025
土地	63,091	18,861	37,413	44,538	-	-	44,538
建設仮勘定	-	22,498	-	22,498	-	-	22,498
有形固定資産計	262,607	84,568	94,260	252,915	53,854	14,022	199,060
無形固定資産							
ソフトウェア	1,770	625	-	2,395	912	395	1,482
無形固定資産計	1,770	625	-	2,395	912	395	1,482

(注1) 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物 販売用不動産から賃貸等不動産への振替による増加19,839千円
 土地 販売用不動産から賃貸等不動産への振替による増加18,861千円
 建設仮勘定 本社新事務所改修工事による増加22,330千円

(注2) 当期減少額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物 賃貸等不動産から販売用不動産への振替44,134千円
 土地 賃貸等不動産から販売用不動産への振替 37,413千円

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	429,350	761,100	2.30%	-
1年以内に返済予定の長期借入金	33,990	52,574	1.35%	-
1年以内に返済予定のリース債務	-	479	10.82%	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	494,803	472,348	1.36%	2021年～2037年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	-	1,828	10.44%	2021年～2027年
合計	958,144	1,288,331		

- (注) 1. 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2. 長期借入金及びリース(1年以内に返済予定のものを除く)の貸借対照表日後5年間の返済予定額は以下の通りであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	57,903	81,827	58,080	58,080
リース債務	479	479	479	311
合計	58,383	82,306	58,559	58,391

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
貸倒引当金	-	113	-	113
賞与引当金	2,617	4,006	2,617	4,006
完成工事補償引当金	1,636	6,763	1,636	6,763

【資産除去債務明細表】

当事業年度期首及び当事業年度末における資産除去債務の金額が当事業年度期首及び当事業年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、注記を省略しております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

a. 資産の部

①現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	1,906
預金	
普通預金	89,618
通知預金	30,582
定期預金	28,601
定期積金	21,600
小計	170,402
合計	172,309

②売掛金

(イ) 相手先別内訳

相手先	金額(千円)
愛知労働局	5,388
株式会社ウィズ・コミュニケーション	330
その他	25
合計	5,743

(ロ) 売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (千円) (A)	当期発生高 (千円) (B)	当期回収高 (千円) (C)	当期末残高 (千円) (D)	回収率(%) $\frac{(C)}{(A)+(B)} \times 100$	滞留期間(日) $\frac{(A)+(D)}{2}$ $\frac{(B)}{365}$
7,209	30,326	31,792	5,743	84.6	77.9

③販売用不動産

地域別	金額(千円)
愛知県	799,363
岐阜県	1,099
三重県	87,358
合計	887,821

④仕掛販売用不動産

地域別	金額(千円)
愛知県	103,944
三重県	39,240
合計	143,185

b. 負債の部

①買掛金

相手先	金額(千円)
株式会社 Seiko Home	1,050
株式会社山西	845
株式会社 SENSE	495
株式会社未来ネット	473
株式会社三京	449
その他	1,322
合計	4,635

(3) 【その他】

最近の経営成績及び財政状態の概況

2023年3月16日開催の取締役会において承認された第14期会計年度(2022年2月1日から2023年1月31日)の財務諸表は次のとおりであります。

なお、この財務諸表は、「財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、株式会社東京証券取引所の「特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例」第110条第6項の規程に基づく監査は未了であり、監査報告書は受領しておりません。

【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	当事業年度 (2023年1月31日)
資産の部	
流動資産	
現金及び預金	598,042
売掛金	32,686
販売用不動産	1,084,503
仕掛販売用不動産	479,818
前渡金	8,208
前払費用	15,483
未収還付消費税	7,133
その他	8,311
貸倒引当金	△ 182
流動資産合計	2,234,004
固定資産	
有形固定資産	
建物	54,777
車両運搬具	2,139
工具、器具及び備品	19,419
土地	23,955
リース資産	1,589
有形固定資産合計	101,882
無形固定資産	
ソフトウェア	1,098
無形固定資産合計	1,098
投資その他の資産	
出資金	8,940
長期前払費用	10,455
保険積立金	41,517
長期預金	25,601
繰延税金資産	13,806
その他	6,594
投資その他の資産合計	106,915
固定資産合計	209,896
資産合計	2,443,901

(単位：千円)

当事業年度
(2023年1月31日)

負債の部	
流動負債	
買掛金	160,754
短期借入金	1,225,100
1年内返済予定の長期借入金	72,539
未払金	29,369
未払費用	8,725
未払法人税等	41,111
リース債務	479
契約負債	12,681
賞与引当金	10,501
完成工事補償引当金	8,667
その他	10,664
流動負債合計	1,580,594
固定負債	
社債	90,000
長期借入金	478,243
リース債務	1,349
資産除去債務	1,000
その他	2,956
固定負債合計	573,548
負債合計	2,154,143
純資産の部	
株主資本	
資本金	1,000
利益剰余金	
その他利益剰余金	
繰越利益剰余金	288,758
利益剰余金合計	288,758
株主資本合計	289,758
評価・換算差額等	
その他有価証券評価差額金	-
評価・換算差額等合計	-
純資産合計	289,758
負債純資産合計	2,443,901

② 【損益計算表】

(単位：千円)

	当事業年度 (自 2022年2月1日 至 2023年1月31日)
売上高	2,814,808
売上原価	2,225,630
売上総利益	589,178
販売費及び一般管理費	545,925
営業利益	43,253
営業外収益	
受取利息及び配当金	192
助成金収入	31,906
受取保険金	539
その他	2,105
営業外収益合計	34,743
営業外費用	
支払利息	32,416
その他	0
営業外費用合計	32,416
経常利益	45,580
特別利益	
固定資産売却益	64,586
特別利益合計	64,586
特別損失	
固定資産除却損	294
投資有価証券売却損	45
特別損失合計	340
税引前当期純利益	109,826
法人税、住民税及び事業税	41,149
法人税等調整額	△ 3,135
法人税等合計額	38,013
当期純利益	71,812

③ 【株主資本等変動計算書】

当事業年度（自 2022年2月1日 至 2023年1月31日）

（単位：千円）

	株主資本				評価・換算差額等		純資産 合計
	資本金	利益剰余金		株主 資本 合計	その他有 価証券評 価差額金	評価・換 算差額等 合計	
		その他利益 剰余金	利益 剰余金 合計				
当期首残高	1,000	216,946	216,946	217,946	110	110	218,057
当期変動額							
当期純利益		71,812	71,812	71,812			71,812
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					△ 110	△ 110	△ 110
当期変動額合計	-	71,812	71,812	71,812	△ 110	△ 110	71,701
当期末残高	1,000	288,758	288,758	289,758	-	-	289,758

④ 【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	当事業年度 (自 2022年2月1日 至 2023年1月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	
税引前当期純利益	109,826
減価償却費	22,122
貸倒引当金の増減額(△は減少)	68
賞与引当金の増減額(△は減少)	6,495
完成工事補償引当金の増減額(△は減少)	1,904
受取利息及び受取配当金	△ 192
支払利息	32,416
固定資産売却益	△ 64,586
固定資産除売却損	294
有価証券売却損	45
売上債権の増減額(△は増加)	△ 26,942
販売用不動産の増減額(△は増加)	△ 196,682
仕掛販売用不動産の増減額(△は増加)	△ 336,632
有形固定資産から販売用不動産への振替	26,253
販売用不動産から有形固定資産への振替	△ 49,456
未取還付消費税等の増減額(△は増加)	2,455
仕入債務の増減額(△は減少)	156,118
その他資産の増減額(△は増加)	19,200
その他負債の増減額(△は減少)	18,317
小計	△ 278,973
利息及び配当金の受取額	187
利息の支払額	△ 35,580
法人税等の還付額	9,155
法人税等の支払額	△ 74
営業活動によるキャッシュ・フロー	△ 305,284
投資活動によるキャッシュ・フロー	
定期預金の預入れによる支出	△ 74,600
定期預金の払戻しによる収入	6,001
出資金の払込による支出	△ 5,000
投資有価証券の取得による支出	△ 600
投資有価証券の売却による収入	4,154
有形固定資産の取得による支出	△ 21,723
有形固定資産の売却による収入	185,101
貸付金の回収による収入	17,954
保険積立金の積立による支出	△ 6,532
その他	△ 4,650
投資活動によるキャッシュ・フロー	100,104
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入れによる収入	2,278,600
短期借入金の返済による支出	△ 1,814,600
長期借入による収入	195,000
長期借入金の返済による支出	△ 169,141
社債の発行による収入	98,053
社債の償還による支出	△ 10,000
財務活動によるキャッシュ・フロー	577,911
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	372,731
現金及び現金同等物の期首残高	122,107
現金及び現金同等物の期末残高	494,838

第7 【外国為替相場の推移】

該当事項はありません。

第8 【発行者の株式事務の概要】

事業年度	毎年2月1日から翌年1月31日まで
定時株主総会	毎事業年度末日から3ヶ月以内
基準日	毎年1月31日
株券の種類	—
剰余金の配当の基準日	毎年7月31日 毎年1月31日
1単元の株式数	100株
株式の名義書換え(注)1	
取扱場所	愛知県名古屋市中区栄3丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 名古屋証券代行営業部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	三井住友信託銀行株式会社 全国本支店
名義書換手数料	無料
新券交付手数料	該当事項はありません
単元未満株式の買取り	
取扱場所	愛知県名古屋市中区栄3丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 名古屋証券代行営業部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内1丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	三井住友信託銀行株式会社 全国本支店
買取手数料	無料
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。 ただし、事故その他やむを得ない事由により電子公告をすることができないときは、日本経済新聞に掲載して行うこととしております。 当社の公告掲載URLは次のとおりです。 https://www.nakayamafudousan.co.jp/
株主に対する特典	該当事項はありません

- (注) 1. 当社株式は、株式会社東京証券取引所への上場に伴い、社債、株式等の振替に関する法律第128条1項に規定する振替株式になることから、該当事項はなくなる予定です。
2. 単元未満株式の買取手数料は、当社株式がTOKYO PRO Marketに上場された日から「株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額」に変更されます。
3. 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を有しておりません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 取得請求権付株式の取得を請求する権利
- (3) 募集株式又は募集新株予約権の割当てを受ける権利

第二部 【特別情報】

第1 【外部専門家の同意】

該当事項はありません。

第三部 【株式公開情報】

第1 【特別利害関係者等の株式等の移動状況】

該当事項はありません。

第2 【第三者割当等の概況】

該当事項はありません。

第3 【株主の状況】

(2023年1月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	株式総数に対 する所有株式数 の割合(%)
中山耕一 (注1)(注2)	名古屋市中区	40,000	100

(注) 1. 特別利害関係者等(当社の取締役)

2. 株式総数に対する所有株式数の割合は、小数点以下第3位を四捨五入しております。

3. 所有株式数の()内には新株予約権の付与数を表示しております。

独立監査人の監査報告書

2023年3月14日

中山不動産株式会社
取締役会 御中

かがやき監査法人

名古屋事務所

指定社員

業務執行社員

指定社員

業務執行社員

公認会計士

公認会計士

林 幹根
武井 正彦

監査意見

当監査法人は、株式会社東京証券取引所の特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第5項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている中山不動産株式会社の2021年2月1日から2022年1月31日までの第13期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、中山不動産株式会社の2022年1月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の事項

会社の2021年1月31日をもって終了した前事業年度の財務諸表は監査されていない。

財務諸表に対する経営者及び監査役の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生す

る可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

独立監査人の中間監査報告書

2023年3月14日

中山不動産株式会社
取締役会 御中

かがやき監査法人
名古屋事務所

指定社員
業務執行社員

公認会計士

林 幹根

指定社員
業務執行社員

公認会計士

武井 正亮

中間監査意見

当監査法人は、株式会社東京証券取引所の特定上場有価証券に関する有価証券上場規程の特例第110条第5項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている中山不動産株式会社の2022年2月1日から2023年1月31日までの第14期事業年度の中間会計期間（2022年2月1日から2022年7月31日まで）に係る中間財務諸表、すなわち、中間貸借対照表、中間損益計算書、中間株主資本等変動計算書、中間キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針及びその他の注記について中間監査を行った。

当監査法人は、上記の中間財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠して、中山不動産株式会社の2022年7月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する中間会計期間（2022年2月1日から2022年7月31日まで）の経営成績及びキャッシュ・フローの状況に関する有用な情報を表示しているものと認める。

中間監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に準拠して中間監査を行った。中間監査の基準における当監査法人の責任は、「中間財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、中間監査の意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

中間財務諸表に対する経営者及び監査役の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠して中間財務諸表を作成し有用な情報を表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない中間財務諸表を作成し有用な情報を表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

中間財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき中間財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

中間財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した中間監査に基づいて、全体として中間財務諸表の有用な情報の表示に関して投資者の判断を損なうような重要な虚偽表示がないかどうかの合理的な保証を得て、中間監査報告書において独立の立場から中間財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、中間財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる中間監査の基準に従って、中間監査の過程を通じて、

職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による中間財務諸表の重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応する中間監査手続を立案し、実施する。中間監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、中間監査の意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。なお、中間監査手続は、年度監査と比べて監査手続の一部が省略され、監査人の判断により、不正又は誤謬による中間財務諸表の重要な虚偽表示リスクの評価に基づいて、分析的手続等を中心とした監査手続に必要な応じて追加の監査手続が選択及び適用される。
- ・中間財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な中間監査手続を立案するために、中間財務諸表の作成と有用な情報の表示に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として中間財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、中間監査報告書において中間財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する中間財務諸表の注記事項が適切でない場合は、中間財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、中間監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・中間財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる中間財務諸表の作成基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた中間財務諸表の表示、構成及び内容、並びに中間財務諸表が基礎となる取引や会計事象に関して有用な情報を表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役に対して、計画した中間監査の範囲とその実施時期、中間監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む中間監査上の重要な発見事項、及び中間監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上